



源氏物語抄卷第十三

目錄

わろか下



為業下

以詞為卷之品 上巻亦下下之事 注之

源氏四十一歳より四十七歳までけるい巻亦あり四

十二より四十八まできたりなきて年月をのこさる

てとあるもあもまじり上巻亦三月迄なる惟也

こころの思入とも 心巻に持ぬことおのひのけてお

ゆ程のまをへ文をけりううさるる

今又おのひおりのう山操をよむお枝よむのまを

ある詞とあはれひのころを理されども我がまをさ曲とや

院のゆため 六条院を長久にともひりうともおまを

山後なごまの巻のうおのひをゆのりうとたり

此よりこれ日とて 主人回車の時春柳一みのてつとて
秀と銘経し首名也

らんやうこれのりゆミ 賭号 正月十八日

條時中もこれを香期^{フクキ}の的^ミ成りけてたおの遊湯共来

おこれ舎人^{ヤリ}村也 友お大お村お酒養をこれ肩^ミ方お

器^{バツヒ}酒^{ノコラフ}とけり 肩^ミ方^ミの^ミ色^ミり^ミあ^ミあ^ミと^ミ酒^ミと^ミ食^ミと^ミ於^ミ手^ミ

中^ミの^ミ事^ミ小^ミ来

三月^{マヨイ}ついでまのさ 落雲の日月

礼記唐もを忌日^ミあ^ミり^ミて忌日^ミは^ミり^ミ 日^ミか^ミら^ミる^ミ忌日^ミ精^ミ

を^ミか^ミら^ミる^ミあ^ミり^ミと^ミあ^ミけ^ミ聖^ミ徳^ミ漢^ミの^ミ日^ミ之^ミ九月^ミの

日^ミ菓^ミを^ミ延^ミ長^ミ乃^ミ帝^ミれ^ミ涉^ミ忌^ミ日^ミの^ミ十^ミ日^ミも^ミ休^ミ事^ミ裏^ミと^ミあ^ミけ^ミて^ミ

ころしおくとかり

あうれ大お 夕^{ヒケク}秀^クと^ミ辨^ミ正^ミと^ミ玉^ミ髻^ミゆ^ミへ^ミと^ミあ^ミり^ミ中^ミら^ミひ^ミと^ミ也

まけらちや 中^ミの^ミ女^ミお^ミ也

うりゆミ 馬^ミよ^ミ不^ミ棄^ミし^ミて^ミい^ミれ^ミ也 天^ミ曆^ミ甲^ミ子^ミ十^ミ月^ミ十^ミ又

日^ニ弑^ミま^ミ字^ミ擬^ミ帯^ミ刀^ニ傍^ミ亮^ミ以下^ミ弑^ミ之^ミ弑^ミ騎^ミ射^ニ次^ニ弑^ミ赤^ニ射^ミ

作^ミま^ミく

あふとり 友^ミお^ミ乃^ミ合^ミ名^ミと^ミ云^ミと

前^ミ後^ミ物^ニ形^ニ 一^ミ吹^ミに^ミ不^ミ若^ミし^ミて^ミむ^ミら^ミひ^ミい^ミれ^ミる^ミと

たふとらひら 三月^ミ盡^ミ 今日^ミ乃^ミも^ミと^ミむ^ミと^ミれ^ミも^ミと^ミぬ^ミ時

ふもたのこもやすま花^ミれ^ミ陰^ミく^ミ

は^ミあ^ミり^ミて^ミ花^ミの^ミ陰^ミい^ミと^ミな^ミと^ミあ^ミり^ミ

物乃祭也 史記曰楚^{ソニリ}之養由^{キトス}基若^{ヨク}若^ニ射若也 去^ハ於^ニ祭^ニ而^テ射^ス之^ル百^ニ餘^ニ而^テ百^ニ中^ニ之^ル方^ニ也 觀^ル者^ノ數^ニ千^ニ人^ニ皆^テ曰^ク善^ク射^ト 朗^ク詠^ス之^ルもひるあり百射事せむ 九十九度中之今一不
甲を射曲と也

とねりやも とも友人其射中^{アズル}事りり成する事せむ也
あく志きてけむ 大やうなるもけむ^キ射直仕合專一と也
徳^イ盛^イびりち^カも^カ礼^イ樂^イ射^イ涉^イと云てはを道^イりす^ル射^イを
思^イむと^イと^イや^イせ^イす^イて^イと^イなり

わ連^イり^イなり^イひ 拍^イと^イ志^イき^イなり^イハ夕^イ夢^イ乃^イ矣^イ止^イり^イ我^イは
へ^イもの思^イひ^イなり^イと^イなり

この志^イち 双^イ地^イ 又^イも^イれ^イま^イす^イり^イも^イも^イ拍^イと^イ曲^イひ^イ中^イ

おま^イれ^イれ^イく^イや^イく^イ志^イの^イら^イん^イと^イは^イ夕^イれ^イひ^イ中^イり^イ
嘆^イ止^イし^イ思^イひ^イ也^イ今^イ乃^イ代^イ中^イも^イ志^イき^イなり^イの中^イに^イま^イす^イあ^イく^イ
事^イと^イその^イひ^イび^イす^イり^イと^イ乃^イあり^イむ^イ也

てん^イつ^イの^イ志^イ 志^イと^イ人^イふ^イ付^イられ^イや^イ拍^イと^イり^イと^イ志^イ也

女^イ流^イれ^イ涉^イり^イふ 拍^イ乃^イ兄^イ弟^イの^イ女^イ涉^イ

あ^イや^イ志^イき 女^イ三^イ乃^イみ^イし^イ涉^イり^イと^イ今^イ智^イひ^イく^イも^イあ^イり^イ

お^イふ^イろ^イけ^イふ 大^イく^イと^イ志^イめ^イり^イと^イも^イ不^イ淺^イと^イ也

春^イ之^イよ^イ事^イり 女^イ三^イと^イ志^イ文^イ流^イ兄^イ弟^イを^イ建^イえ^イ端^イを^イす^イ拍^イ乃^イあ^イへ

さ^イと^イる^イ也

い^イも^イ射^イりの^イ 志^イ文^イ乃^イ流^イる^イり^イな^イま^イは^イと^イなり

う^イらの^イ流^イ秘^イこ 小^イ志^イ記 也^イ保^イ元^イ年^イ九^イ月^イ十^イ九^イ日^イ日^イ若^イ回^イ裡

子猫産子チコウムラ女院メノ方大オホ良ヨシ大良オホヨシ産養ウツ事コト一ヒト三ミ種シユ室シツ椀ワン飯イハ納ナド

管カネ夜ヨホホと云ト猫ネコ乳メド母ハハ馬ウマ命イノチ婦メノ時トキ人ヒト笑ワラ之ノ害ガイ怖コソるル也ヤ天テン下ゲ

以モト目メ為シ之ノ可カ也ヤ激ヒキ丸マル未ミ定テイ會ケイ款クワン一ヒト用ユウ人ヒト乳メド噉タム半ハ 花ハナ

何ナニ々々々々 肉ニク裏ウラのノ猫ネコ子コ所トコロくクにニとトりリ分ワまマいイまマり

桐キリ壺ヒへヘ注ツぐグ入イらラれレてテ女メノ三ミへヘ注ツるルのノ

山ヤマ崎サキとト 柏ヒノキをヲ束ス文ブ丸マル老ラウるルはハ世セをヲうウたタるル淨ジヨウ氣キ多タとト云ト

云トしシるル也ヤ

又マタいイまマもモ 拍ヒキ米メ菴サウ院インれレ故コ春ハル文ブンへヘ乃ノむムのノ注ツぐグとト云ト

一ヒト魚イサ舟フネふフおオ向ムカ志シくクとト云ト也ヤ

いつイツつツあアのノみミ一ヒト人ヒトハ 拍ヒキ猫ネコをヲいイけケくクみミ一ヒト人ヒトをヲ云ト

多タカカササクク 多タカカササククのノ松マツとト云トるル人ヒトとトありアリ 也ヤ

むムいイうウ私シ小コ猫ネコとト云トぬヌとトおオりリひヒげゲてテのノ

わワあアまマ人ヒト 怪カ不フ三サン物モノとト云ト也ヤ

まマさサおオとトもモうウのノゆユめメらラとト 乃ノゆユめメをヲもモあアつツりリおオ入イとト

にニ況キウやヤこコもモのノゆユりリをヲこコもモとト云トるル也ヤ

いイもモもモもモやヤとトいイむムぬヌゆユのノあアくクるルはハ猫ネコとトもモれレとト

あアらラしシのノ行ユクとトいイむムのノ何ナニもモ心ココロをヲ回マワすス

秘ヒしくクとト花ハナ猫ネコ字ジのノ音ネめメくク秘ヒしくクとトいイむムとト云トるル 又マタ喜キおオおオ喜キおオとトいイむムとト云トるル

又マタ喜キおオおオ喜キおオとトいイむムとト云トるル

意イわワらラうウ文ブン 唱ナゲ音オン ねネとト猫ネコとト云ト後ノチ候キタマフ祿ロクとトのノ唱ナゲ音オンなりナリ

むムうウれレ聲コエらラうウ也ヤ

唐カラ或ナニ家カ何ナニ之ノ妃ヒのノ後ノチ方カタ為ナリ猫ネコとト云トるル又マタ只ただこことト云トるル也ヤ

清猫産子女院大良大良産養事一有
管夜ホと云く猫乳母馬令婦時人
以月若也可也激ハ未キニ禽キニ用ル人乳ラ喉平花

桐壺へはくられて女三へは承るの
肉裏の猫子所くはらふまいさり

又い文も 拍朱雀院れ故春文へ乃びの所くはくを
——魚卵ふおお向志くはくも也

いつくあのみ一人ハ 拍猫をいけくみ一人をく云く
多病るれハと花は高砂タカサの松とくもく人となり

むいりし私小猫くも女三をわひしりての
わあまへ 怪不三物と也

まさかともさうゆめつと 乃れぬやもあつうれく
に況やこもこのよりをくもくもくも也

どもよそもやしくむぬわのあくるは猫くもれく
あうしとのけくもくもくもくもくもくも

うしともさくむら 詠うくもくもくもくもくも
又喜おみ猫わりのひくもくもくもくも

あわつう文 唱者 ねと猫くも後候詠くも唱者なり
むりれきりや

唐成家阿之妃の娘方為猫くもくもくもくもくも

猫

こぢり 不審^{フシ}なたてし

まゝりめをゆり 志まらるる^志猫とめくろさるる事なり也

た大ぬのお芳 玉うろくき後仕れぬ子達より之を言ぬ

吾は兄弟才を乃振ふ志くを志ぬふとるなり

志げゆき 明る申す

れとと悉 ひあ恵

あのゆりく 玉うろくに男ゆき也と取留お子とく

ゆりゆりく くらぶすすへし

ゆ子れおゆき 言ふんみのとあり 苗云おらうこれ

りますゆへの 或戸のまの落志と取見才也

あの院大汝 源氏と後仕と也

大ぬえ 舞志

ちの母の 志^ヒ本^キ種^タの志れむ中

あまをそ あまをそ乃むん

大文何らし 或戸のまの室

文けへく 志^ヒ本^キ種^タの字

大文さ女子あれた 或戸のまの志れむをめやむ事なり

舞志室又女ゆの秋好く けをゆれゆへり

てゆり 舞志をよまらるるをま又おあかてつり

あゆりひゆへり

まきうせけひ 共志のまの志れむをめやむ事なり

あけうれたつりふおけり見ゆいなりと

玉^タ駐^カ勢^ツ乃^シ心

まへく玉へ心成りけりひりおさひきたるを多く
たまひよと源も無念と思ふことなりぬかこの思ひん
とある

かとも例のく大ぬりくへ玉を成らむとあり
し思ひしと也

ゆりゆりまきまきまき 兼て共れ成り人
せうと悉く 拵指兄弟也

ゆりゆりまきまきまき 兼て共れ成り人
も不意のかわりてゆひのよりゆり共れの心
玉乃無切をゆりゆりまきまきまきと
ゆりしるれとたり

みこたちを 肉へ着くすてまふと人たつとするを二

心かれようをとれとめて大おあつをゆくを共安結終
あり

ひういと めと乃水方あり時ふとたり

くくあれくこれ まが乃中て二年としるを

されとを^{カニ}嫁と云ひてと云ひ元共乃まよおるう
りち也時くをゆりかたりなり

肉乃みのとのゆ位よ 清和天皇治十八年元貞觀を^年終

内のみと花冷泉院源氏十八歳の時受禪を
とある年と在位の時めより源氏四
十六歳より十八年とあるは十八年の在位
清和天皇の例也

終六十一歳の時受禪 源氏八女 今四十六歳と受禪

多入くおへ心成りけ給ひしふるひきたるを多く
志す心より源も無念と思ふことなむの思はし
とるる

おとす心より大ぬりしへおと成るる心より
し思ひしと也

おとす心よりし思ひしと也

せうと志しし 持指見事也

おとす心よりし思ひしと也 共部へ持指とのき也
も不志のかやしてつひのよりし思ふ共部の心より
おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也
おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也
おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也

みこたちを 肉へ着くすてまふと人たつとするを二

心成りしとれとめて大おあつを多くと共安結新
あり

おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也

おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也

おとす心よりし思ひしと也 持指とのき也

内乃みのとの心位よ 持指天皇治十八年元貞觀を總嗣

例 親王の持指ふりるまとま心也 河 十八年十の

持指位よ持指天皇よ准を冷泉院 源氏十八年に生連

持指十一歳の時受禪 源氏八女 今四十六歳に受禪

持指天皇治十八年元貞觀を總嗣

十の十八年より成死

世中一もろなく、冷に西子る死心也

心やましくお母ゆ、心ハ思入くおもと可心也

源氏がまよ心おれたり、お建後ひ多くれ心の心お
乃町をさりとてをま又うておろく、ままのなり

とく、陽成院依託、ニギハヤヒ脱履のるあり

り、これる、冷泉院依託、太政大臣、白く、お清治を

るり、おふよて又職を辞して、お仕をんとする

年ゆり、まがれ、う、少り、う、おん

坂漢書、ハルボクお崩字、ハ子、兼、お海人、掛冠、フサク避世、ヲレウ遠、ニ子、兼、を、イ殺
て、不用、掛冠、を、今、の、心、と、を、お、遠、若、れ、レイ例、計、也、日、本、の、カシマ之、冠

と、り、を、ま、て、お、仕、以、や、め、ん、と、の、心、也

左、お、お、お、お、ハシお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

冷泉院、花帝王系、云弘仁十四年四月十一日、近于
冷然院、十七日讓位、於皇太子、天曆八年三月、以必中、若れ、字ハ、冷然院、を皇
十一日、改冷然院、為冷泉院

お、お、お、お、イキお、お、イキお、お、イキお、お

十の十八年より成死

世中一もろなく、冷に西子る死心也

心やそくお母ゆつ、心ハ思入くおもと可心也

源氏が電ふ心おれたり、め、お建経ひ多くれ心の心お

乃町をさりとてをま又うておろく、ま、ま、ま、なり

と、陽成院依所、拙履のるあり

ち、これるう、冷泉院依代、太政大臣、白、一、経、涉、位、を

るり、おふよて又、職を、辞して、致仕を、んとるる

年、ゆの、ま、お、れ、の、う、少、り、と、の、お、ん

故、漢、書、の、進、前、字、ハ、子、康、ハ、海、人、掛、冠、避、世、遠、東、子、康、を、

と、不、用、掛、冠、と、今、の、心、と、を、お、遠、若、れ、例、計、也、日、本、の、之、冠

と、を、置、て、お、仕、成、や、め、ん、と、の、心、也

左、お、お、お、大、臣、舞、志

女、お、れ、君、舞、志、妹、今、上、母、女、お、承、香、殿

お、さ、り、あ、る、涉、位、贈、官、お、皇、大、臣、な、り、る、

西、邸、位、乃、時、あ、る、お、ま、よ、と、い、お、給、お、一、所、も、り、不、意、と、れ

る、お、祇、一、条、禪、園、扱、へ、一、冊、西、邸、位、の、次、弟、と、お、中、一、り

物、一、ろ、百、文、迄、を、中、曲、也

六、条、の、女、お、明、石、中、一、文、乃、は、腹、中、子

大、規、之、に、成、り、て、ま、つ、れ、ひ、こ、ま、よ、夕、旁、方、大、お、と、通、官

冷、泉、院、お、ま、井、乃、み、り、と、お、必、中、若、れ、字、ハ、冷、泉、院、と、

少、御、大、あ、り、し、り、泉、字、の、い、お

天保十一年
八月十一日

おろすすぢなれと 源氏乃^{ヒコウ}美英の御子なり事と冷れ御
存ありなりと御ひなやと御の事と見え御ひな
おろすすぢなれと見え御ひなやと見え御ひな
陽成院を清和乃御子なるれ也自^チ葉平二條^{ヒコウ}家母の
由け御経よりお知らる

春まおの 明名申 二十八年と出て年と送れあひこ
よ御腹お御子あはたあつたなり

源氏七代をくま ^{ヒコウ}
源氏のうちつらき花うと重女院 光帝御女相立后
秋好中^{ヒコウ} 前清和女冷泉院后 明石姫君 ^{ヒコウ} 今上后
二條を源氏の御子と見え御ひなやと見え御ひな
秋好中^{ヒコウ} 前清和女冷泉院后 明石姫君 ^{ヒコウ} 今上后
二條を源氏の御子と見え御ひなやと見え御ひな
秋好中^{ヒコウ} 前清和女冷泉院后 明石姫君 ^{ヒコウ} 今上后
二條を源氏の御子と見え御ひなやと見え御ひな

秋好 又的^{ヒコウ}の御子 清和
れる事なりと見え御ひなやと見え御ひな
例也秋好不^{ヒコウ}惑乃后と今源氏
めあはれなりと見え御ひなやと見え御ひな

めすむぢり

院れみりこ 冷泉院御幸 六条院へあり

姫君乃^{ヒコウ}あしと 女三女

御門御心と見え御ひなや 今上

いさこのあひぬ 紫上と源との御中れ事一也

れこまひよと見え 紫上源氏へや見え御ひな

あつたふりしらん わりみりうらあひりらん事を思ひ

て源道延川と也

御ひなを御ひなやの 内乃^{ヒコウ}後思と見え御ひなやと見え御ひな
紫の御ひなやの御ひなやと見え御ひなやと見え御ひな

よと見え御ひなやと見え御ひなやと見え御ひな

源氏乃其妻の御子なる事と冷れ清
存ありけりし御ひなやとゆふ事と云ふ事とせゆふぬ
家子つとむの御ひなやと云ふ事と云ふ事とせゆふぬ
陽成院を清和乃御子なるれやも業平二條衣家母の
由じ御経よりお知らる

春之御所 明之申 文十八年と出て年と送れありし
よ御腹お御子ありたあらつたなり

源氏れお所へき 薄雲 秋好 又的御婚志 薄雲
秋好を 源氏婚ハ御される事なり 又云皇女を源
氏よりとの源氏必所なる例也秋好不意乃治と今源氏
れ御思と云御入り源乃め御れなりと一入きうと思

めすむびり

院れみりく 冷泉院御幸 六条院へあり

御文乃御しと 女三宮

御門御むとくめく 今上

いさくのありぬ 紫上と源との御中け事一也

れこそひよきや 紫上源氏へや御入る

あつふふしうん わりみうらありのらんを思ひ
て源道延川と也

御しこそ御くれうの 内之乃後思と云其母と云思食衣
紫の御ためたのゆきとけり

よして 縁中くしうらうてとあるといふ

源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語
源氏物語

目とくしくして奉命をたためし成とすやい
のらりきざりかむる

丁酉一乃所執 長保三年九月九日所堂又白 丁酉 右大臣

後方家系不流あり并 恒為_ニ長_ニ持_ニ辨_ニ系_ニ亦

在之今東源氏系相異亮上奉_ニ頒_ニ恒_ニ可_ニ准_ニ之_ニ 亮

年くし乃志秋す

唯所入道執一毎年せし辨系するを 時

さらきと 出でてさるとる

あしきし 女く也

ひーれをの 文野大外_{イハクミ}益也

密_ニ通_ニ女子_ヲ為_ニ承_ニ香_ニ殿_ニ母_ニ所_ニ延_ニ表_ニ帝_ニ 賢人_ト聖人_トなり乃

さるる

明心へると地しーりくるる

くろん乃 明心へ道執とを不流也

物ありーりとしし こそはくーし不恒表_ニ頒_ニ恒_ニ自_ニ分

流執を_ニ成_ニ執_ニあり

たい乃くもぐー 浄雲殿例

兼人 志きくち 東_ニ極_ニの兼人也 東遊_ニこ_ニん

兼人の兼兼人の十人石流あり兼兼の陸時条のし 後とて流家れ流大夫なり
六兼府のときとも流後とて兼人と云十二人四
位五位六位各四人これと流とのときと云り
めすよしんくろり又くろりたるふりか倍後
と云これと兼兼の府あり物二善自然近流使
の内兼人陪後のみを兼兼の官人ふ之陸時条試
示洞示をい兼兼の陣とてこれをばふなり陪
後い多い兼兼つらこ

後とて流家れ流大夫なり
くろりたるふりか倍後
の官人ふ之陸時条試
をい兼兼の陣とて
これをばふなり陪
後い多い兼兼つらこ

人数又ありとみしーり陪後ハ十二人并兼兼の人数多し

目とくくくして命をくれたり成とくくいの
のらりきとりの心るる

丁未の年九月九日正堂受白 丁未
古大臣

陪為家系不流の并 伴 佐高孫東持孫系亦

在之今東源氏系相具亮上系箱佐者可准之 亮

年とし乃志秋

明入道親王毎年せし祿系なり 時

さるる 出 出てもさるる

あしきし 女 女し也

ひりれ在の 交野大外 派益妙

さるる

ミツコカウ 密通女子為承香殿女 ウミタニル 延嘉帝 聖人 聖人なり

明入ると代し さるる

くわん乃 明入道親とを不流也

物あり さるる し こお かく 小 佐高孫 乃 自

流系を成流あり

たの 乃 ころ も ぐ し 流 雲殿例

雑人 た ち さ ころ 東 持の雑人也 東 遊 さ ころ

とく陪後をつれら 乃 陪後とて流家れ 乃 丈夫なり

め 乃 陪後とて 乃 人 と なる 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

後二字成 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

みの 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

人数又ありとみ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

Handwritten notes at the top of the page, including the characters '明' and '入'.

ひまうひの徳力 馬割ゆれするりもあまの力の中
君がさういぬ

母沙のほめれとい乳母は母乃心知也若葉固若成へし

人たふい 人馬車あつ用さして泣か成せ下ま用也

何れ 明石上の町ころと云むやうれ後と云むる

此別字まふと云むるさあまを別の字むと云むる

ころろあつすち方として可成りあわれを流といふ字

おひのあまの志いれしをうり花右今也か

なだの志いよやあかれん

十月ちの十日をねい花一月四日と上中ト二十日 流位は流文行せん世流也

けをいふあまの十日の十日といふト一

ころもまろしき尼と云なり

祇のおりえ ちもやあま祇のけりえにそよ昔も然よ

まの池をうりろひうり

をとり乃と杖を お葉をぬとれとの山ハ吹風乃言よ

杖をまはれらん 夕まきみえとらと也まに引くを

ちま下のみちをうりといふんたあま

あつ乃あそむの 天照太祇志戸に終りひの時袖し樂也

けくそをちれけく 赤穂のん太報なりさそけくこさう

つや又けくみえうすとの 松 恒有れ流祇系う

跟て報とこをりるも也 流が祇乃うへを流へ

れと祇人中へ侍るると云く 愚又可哀く こくみハ

和琴也けくこを放たるともけくこさうたね心の

山あ井り 赤葉條時系祇人竹又ち摺袍蒲瀧原下終地

Handwritten notes at the top of the right page, possibly a list of names or titles.

ひまうひの徳力 馬廻りウマヅケはれするもあまの力の中
君キミのさゝい丸

母沙のほめれとい乳母オナノは四乃心知也若葉因若歌へし

人たふい 人法車ふる用さして泣か成光は下まし用也

阿うれ 明石上ののころと云むやうれ後ノチとまひるを

地別字チベツジまふとまひるをさあまを別の字むとて月り

ころふんあふさ方として可読のあられを流とのふ字

ろし叶なり

たのめやうなりん トウカマ 東之河位は流をけんせは也

りともり カミツキモチロシ 生付勿論乃垂るとも多しとまニマタ尼ぶとなり

祢のおりえ カク らもやあ祢のけりえにそあ昔もあよ

まの池まうろひうりり

をとり乃と林を 柳をぬとれとの山ハ吹風乃言もや

林をまほれらん 夕まきみえとらと也まに引りむ

ら下のみちをさるといんたあもや

あけ乃あそむの 天照太林志戸に務めり一町袖し樂也

ゆくをさぬゆく 赤梅もん太報タウコなりさてゆくとまう

つや又ゆくみえうくすとの 松 恒るれ流林系る

跟ツミて轂ツミとくもさるもあ也 流が林乃くへをゆへ

れと祢人中一侍とると云く 愚又可笑し ことみハ

和琴也ゆくと放ナたるともゆくとまうたわ心の

山あ井り 女舎條内系藤人竹文ち摺袍スリホ蒲瀨原下カサ子後地

摺袴合袴陪後摺摺又摺袍御下發白長袴合大赤
洗淨替結引若未各因付之 詞の所くさるう東遊乃
彩也

松乃みより 伯吉れ松なり

あまー乃花れましく

條町の奈乃粹臥は夜兼人様陪後ハ山吹

日りのきで

海のいいろふ 又めくじ也

とやめこものる 東極禱云え一二言次後河津流求子加太

お島之洞子高繫乃双洞也 弥社引幸之町求子もてく

ふつ以下十人ころえて舞事あり町これうーと云

下りてくまの花をわくまのころの下の影の父 持はとの父とてんぞてくこ
ろいさあひあふ人の下まひとまの紅のあこめ
たれとまろへりみらの女とまろへりてつら
也 花下下略

引がらうりー ころぬくとつり

松りくとまて 面白洋やみよりかりる父と忌とる

うれしむ萩と 人長の持るー也 為る柳と持る

清暑堂 大極原の内を 河津系城と執柄家とこれこお

もあけ持るは持とまとほよあり噂よいのしとあつ

人もと河よあつ 誤れ東遊も人もハ舞也ーとる

殿上人陪後まあつすーと葉とる也 依前萩とのさー

なるなるるー 東極持るし町けうりけなり

段仕乃 次下まそは尋まーしゆへまつ

摺袴合袴陪後欄欄ハシロ又摺袍御下アヲ發白長袴合大ハナ赤
洗ミソ臂結ヒビ引ヒキ帯オビ未ミ各ナニ用ヨウ付ツケ之ノ 詞コトのハ所トコロくスまマうウ赤アカ遊ユ乃ノ 彩イロ也

松乃みどり 佐吉れ松なり

あき乃花れましく

條町の松乃挿カサレ臥ハ夜ヤ寐メ人ヒト様陪後ハ山吹

このまて

海のいゝろふ 又めくじ也

とやめこまのる 赤袴云え一ニ言次コトノ強ツヨクはハ袴ハカマ求モト子メ加カ太

お島之御子シマノミコ高タカ懸ケ乃ノ双フタ袖スリーブ也 袷アヲ社ヤシ乃ノ幸サチ之ノ町マチ求モト子メこコてテく

ふつ以下十人こゝゆえ々ツ舞マユ事コトあり町マチこれうウとト云

刈是也 忍ニガ父チをヲ三ミ白ヒ衣イ下カミ袴ハカマはハとの父チとト思オモひヒこコ

ゆまユマとト也ヤ町マチこコぬヌまマ赤アカ袴ハカマ也 花ハナ下カミ下カミ懸ケ

引ヒキがガらラりリーーこコぬヌくクとトつツりリ

松りマツとト思オモひヒて 面白オモシロ洋ヨウやヤみミとトりリなりナリ又マタとト思オモひヒとトるル

れレとト思オモひヒて 人ヒト長ナガ乃ノ指サシるル也ヤ為ナリ為ナリ柳ヤナギとト指サシるル

清暑堂セイショドウ大オホ極キョク厚コウの内ノをヲ 赤アカ袴ハカマ茶チャ絨ジウとト執シツ柄ヘイ家ケとトれレこコお

もモあアくク指サシるルとト思オモひヒて 云クモとト思オモひヒはハありアリ呼ヨびビのノこコとトあアるル

人もヒトとト河カはハありアリ誤アヤカカ赤アカ遊ユもモやヤ人ヒトもモハハ袷アヲ袴ハカマ也ヤとト思オモひヒとトるル

殿上人ヘイジヤウ陪ヘイ後ゴとト思オモひヒて 赤アカ袴ハカマとト思オモひヒて 依ヨるルとト思オモひヒて 乃ノこコとト思オモひヒて

なるナルなるナルるルーー赤アカ袴ハカマをヲ 町マチけケりリなりナリ

段仕乃 次ツギ下カミをヲ 赤アカ袴ハカマとト思オモひヒて 乃ノこコとト思オモひヒて

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured.

二れくるは ちつてよびへりす 一番乃車れ次成

るー 棧サシ者打や肉こへ入給ひてると

澄の又言 源は下物との事也

と城うむさ 明も入道なりなり

まこれ江を言 恒吉れ排力ゆへぬひりのる形とせらふ

やちるらんわの乃もせゆもんにうめり早下せり

おそぬけゆうらん新尊上とよまへし

ひーくう言 的の上独吟ハ明也ぬは勢富にけし排

法と忌ぬくまると源より尾志へ花巻くるとおのひより

この独吟くや

伊門より外れ 志母カハ唯ハ費上ノコラ志眼カハ不ハ見門前事

恒吉の言 登上心も明也

たのひくれ物居の 清補洞ツボ袋若まうん 又何ん言

はくしむの山向人ゆふ

小貝也 花打とま向張人

り

土生志見奇をままのよて

而今 源氏物語みりくはき

たむの物居の花清補袋若まうん又時分ひりり
まの林の心より了し此良のまゆふらうせり
しとあまけ又時分此良のまゆふらうせりといひ
君と種もり分とて受えしゆれまうすて此良の
心のゆふらうせんすおあつらうし又又時と合ま
あつらう名たうとそ受えしゆらうゆい実吹越り次
戸の浦をせのまのまの思見集よゆくと行平
中物居のまのまのけお流しよのせうりそれと後右
今よ源氏よりつてて則行平のまのまのいりり
ちり思えんかまよてゆりか枝のまゆふらう又何
管ととのせうりも思えんかまよてゆりか枝のま
人のまよと僕家お初たりあつらう又清補袋
若まの源氏お初たりあつらうあつらうあつらう
あつらうを又時とあやまうてりやうまゆらうん
いふも源氏の鏡をかうて実吹こゆり下魚の
浦凡の例といくへりなり

乃キ程シ不シ露シ云シ

あつらうの言 祝子中勢登よりこの女登前うち志成

二れくるす ちつてよむへくす 一番乃車れ次成

る一棧サシキ者打や肉こへ入給ひてま

澄の又言 源ひ下初との事一也

よ取らむさ 明入道よりなり

すまれ江を言 恒吉れ林力ゆへぬひらのる初とせらふ

やちうらんわの方乃もをゆうもんにうめり早下せり

言きぬけゆうらん神尊一とまあへし

ひーく言 的の上独吟ハ明也ぬひ懸シギク了れす林

流と志ぬくまると源より尼志へはきくまよかりひより

この独吟一也

西門より外れ 志耳カハ唯カハ書カハ書上カハ云志眼カハ不カハ見カハ門前事カハ

恒吉の言 堂上心を明也

たのひくれ物居の 清補洞鳥袋若まする人 又何ら言

ひもろきを林れひようをけくしむの山の人ゆふ

うくきり ひとぬきま林具也 花打とま向張ひ人

まゆみうくくま雪をよあり

又何カハを給カハとくまカハ撰カハくまカハ礼カハ王カハせカハ志カハ見カハ奇カハをカハまカハまカハのカハよカハて

け平言とく人ば心同懐た今 源氏物語みりくけき

てけ平と入

清補袋若子源氏以後也何乃撰カハ不カハ書カハ云カハ

りく人の言 ぬる女也

まかりく言 祝子中勢堂よりこの女登前うち志ぬ

Handwritten notes at the top of the page, including names like 'Kenji' and 'Kenshi'.

律の朔受志^{シツ}しれはるゝと

まや^{ホク}す色 中^{ホク}末也 詠^{ホク}物 中^{ホク}年、 けりさ^{ホク}波^{ホク}我^{ホク}を^{ホク}之^{ホク}の

けり^{ホク}夫^{ホク}て^{ホク}る^{ホク}や^{ホク}ひ^{ホク}れ^{ホク}め^{ホク}れ^{ホク}律^{ホク}と^{ホク}志^{ホク}け^{ホク}し^{ホク}め^{ホク}ん

ゆ^{ホク}の^{ホク}あ^{ホク}て^{ホク}何^{ホク}れ^{ホク}と^{ホク}て^{ホク}り^{ホク}下^{ホク}句^{ホク}回^{ホク}前^{ホク}末^{ホク}の

ゆ^{ホク}く^{ホク}れ^{ホク}と^{ホク}て 律^{ホク}樂^{ホク}する^{ホク}人^{ホク}の^{ホク}面^{ホク}なり

まん^{ホク}さい^{ホク}く^{ホク} 千^{ホク}さい^{ホク}く^{ホク}千^{ホク}歳^{ホク}や^{ホク}ふ^{ホク}せ^{ホク}の^{ホク}千^{ホク}さい^{ホク}や^{ホク}海

しん^{ホク}さい^{ホク}く^{ホク}や^{ホク}美^{ホク}の^{ホク}芳^{ホク}歳^{ホク}也

る^{ホク}世^{ホク}と^{ホク}一^{ホク}敷^{ホク}る 秋^{ホク}れ^{ホク}の^{ホク}の^{ホク}敷^{ホク}と^{ホク}一^{ホク}ふ^{ホク}お^{ホク}き^{ホク}り^{ホク}と^{ホク}い^{ホク}て

も^{ホク}秋^{ホク}里^{ホク}そ^{ホク}多^{ホク}や^{ホク}鳴^{ホク}る^{ホク}し 討^{ホク}計^{ホク}の^{ホク}む^{ホク}も^{ホク}可^{ホク}法^{ホク}也

ま^{ホク}く^{ホク}の^{ホク}け^{ホク}ら^{ホク}め 回^{ホク}位^{ホク}又^{ホク}位^{ホク}依^{ホク}官^{ホク}位^{ホク}

ま^{ホク}よ^{ホク}む^{ホク}の^{ホク}れ^{ホク}と^{ホク}て^{ホク}り^{ホク}て 志^{ホク}純^{ホク}の^{ホク}面^{ホク}織^{ホク}也^{ホク}竹^{ホク}の^{ホク}面^{ホク}を^{ホク}織^{ホク}る

物^{ホク}ま^{ホク}く^{ホク}り^{ホク}と^{ホク}と^{ホク}と^{ホク}と^{ホク}可^{ホク}法^{ホク}也^{ホク}ひ^{ホク}ま^{ホク}ま^{ホク}あ^{ホク}り^{ホク}と^{ホク}い^{ホク}て

と^{ホク}ま^{ホク}て^{ホク}可^{ホク}法^{ホク}也 仍^{ホク}法^{ホク}説^{ホク} ね^{ホク}と^{ホク}て^{ホク}ハ^{ホク}如^{ホク}相^{ホク}判^{ホク}を^{ホク}す^{ホク}し

て^{ホク}下^{ホク}と^{ホク}あ^{ホク}そ^{ホク}ら^{ホク}ひ^{ホク}ぬ^{ホク}き^{ホク}不^{ホク}盡^{ホク}の^{ホク}織^{ホク}て^{ホク}り^{ホク}不^{ホク}盡^{ホク}は^{ホク}に^{ホク}押^{ホク}て^{ホク}と^{ホク}い

か^{ホク}ま^{ホク}討^{ホク}前^{ホク}後^{ホク}と^{ホク}り^{ホク}織^{ホク}也

り^{ホク}あ^{ホク}い^{ホク}ば^{ホク}ん^{ホク}た^{ホク}う^{ホク}へ^{ホク}れ 志^{ホク}純^{ホク}又^{ホク}討^{ホク}け^{ホク}し^{ホク}さ^{ホク}ら^{ホク}け^{ホク}敷^{ホク}也^{ホク}切^{ホク}ら^{ホク}と

く^{ホク}こ^{ホク}さ^{ホク}り^{ホク}る^{ホク}と^{ホク}り 入^{ホク}道^{ホク}乃^{ホク}す^{ホク}ら^{ホク}と^{ホク}す^{ホク}一^{ホク}の^{ホク}款^{ホク}後^{ホク}也

く^{ホク}し^{ホク}思^{ホク}案^{ホク}する^{ホク}ふ^{ホク}お^{ホク}ぬ^{ホク}が^{ホク}可^{ホク}法^{ホク}と^{ホク}双

あ^{ホク}さ^{ホク}こ^{ホク} 俗^{ホク}後^{ホク}の^{ホク}あ^{ホク}さ^{ホク}む^{ホク}と^{ホク}云^{ホク}討^{ホク}也

入^{ホク}道^{ホク}乃^{ホク}み^{ホク}の^{ホク}と^{ホク} 朱^{ホク}萑^{ホク}院^{ホク}

志^{ホク}秋^{ホク}れ^{ホク}の^{ホク}章^{ホク} 春^{ホク}秋^{ホク}乃^{ホク}ひ^{ホク}を^{ホク}お^{ホク}観^{ホク}

礼^{ホク}記^{ホク}云^{ホク}春^{ホク}見^{ホク}ふ^{ホク}物^{ホク} 秋^{ホク}見^{ホク}云^{ホク}觀^{ホク}

この院をい 六条院

うらぐのゆひを 南より女之へ乃事ひよを
むくと朱雀院より南へ北也

二系にけりゆて 女之れる けるハ二系也

みふぢや 氏^{ミシコ}をよき事けりし

まことゆふ 女之乃感^{イカダ}ゆきけり 慧心

我乃ハ一系 源氏を幼^{コウシヤ}より只一人を執^{シツ}けり也

ゆらんよを 女之らん世後也

内乃ゆりゆ人 源の心中夫子ゆ人女之と思ふる也

ろりおねもたれたてすつらとる也

ひととるふ 女之へと慧心とのゆひも慧心

成り也

けつれなく 慧心ゆひのありなくも

女一文 的る中一交股ハ女一文也

こたよよりきて 慧上れりけり人

おのひとる 慧心中

内乃ゆりゆ 惟之の女乃女子

あむまゝともとるくありひなり

すくなれゆきと 源のゆりれすくなけれと朱雀也

女乃大との ねゆけとも夫が 慧也

今よゆ 玉^{カウラ}慧男

姫志のみう 女之

女涉れ志 相壺持来

あの文をよむ 女三

み文をいふらんく 花廿一 文ゆゆん ちのさむせ

たのめんらん 女三

たつるとおんく 女三 米へまのつとあくとるこ

つづけるは 次のやうくささきまのらんとなり

次めりてき イナ

ちちた戸らん年 米佳成明年又十源氏 四十六

歩心ちしひせ 精をゆきあふひつりひきて歩し入と也

たれたとわく お木たれ兄弟男志也

せりののこい せやりのうへとなり

文をよむらん 女三 米佳より琴を習はるらん源氏中も也

お母はつなく 女三の源氏に琴を引給やとる也

さりとともくつらき 女三の源氏に琴を引給やとる也

たのめく 大曲むハ 角夏を徴材を高冬を母去用を

文儀寒呂を温之高角徴母

元のさむらぬらき 樂書曰師文之變易寒冥涼登之感動

風雷ふく謂琴事也母也去師曠音之樂官也上於琴也

易電黒上雨雨る晋平公報之感玄鶴下舞

ゆしあんすく 由をゆらあんすくをすなり

伝子二とらん 明石中文殿也又りとあつさ白文懐姫也

十一月とらん 十一月とあが十一月も祓るなり

女涉れ志 相壺持米

あのみこと 女三

ひりふぢらぬく くららちんこつれ

たのめしるん 女三

八つらぬく 女三未へまつらぬくとるこ

ついでるは 次のやうきさきさきまのうらんとなり

次めりてき イナ

ちちた戸らん年 未佳威明年又十源氏 四十六

歩心ちしひせ 精ヒコラニをゆきあつひつりひきて歩い入と也

たれたとわく 未未拉れ兄弟男也

せりりのこい せりりうへなり

まきとやうと 女三未佳より琴を習はるる源氏也

お月けつなく 女三の源氏に琴を引給やとる也

さりともしつらき 女三の源氏に琴を引給やとる也

たのめく 大曲むハ 角夏を徴材を高冬を母去用を

之儀寒呂を温之商角徴母

光のさむらぬき 樂書曰師又之寢カニ易寒冥涼登カニ之感カニ勤

風雷フウライふく謂琴事キ也母也去師カニ曠音之樂官也上カニ於琴カニ

易電カニ黒カニ石カニ雨カニるカニ晋カニ本カニ公カニ報カニ之感カニ去カニ鳩カニ下カニ舞

ゆしあんする 由をゆらあんするをすなり

伝子二とら 明石中文殿也又りとあつさ白文カニ懐カニ姫也

十一日こし 十一月とあが十一月も抹るりカニ多カニ月カニなり

十一日は十二月十一日神今合一候の祓り

伊豫天照太神勸禱^{ウツノミコ}して天子自禊^{ミタマ}を修^シりて修^スる

その夜は月 源れめて終る

そのころ 樂^{ウタ}ひてりくる也

そのおひく 女系 女三宮乃出たぬ 朱雀院より此所

祓禊^{ハヒシ}也よの人きく女系までまゝ 物類

そのわき 源乃出たぬ也

そのくしを流る人 源女系より樂^{ウタ}のこころを心入

好ひとたり

琴 中^{ナカ}あもさるるもよるをいとま

はなことの祓 さん 女三宮乃を世上よまをくいと也

女一二はりり 十四歳より源へ出きて八年よ成也

おんろ 朱雀院

月よき 二月の夜なると也

あんなんよわく 女三宮乃くへ登上りて也

こなたに 女三へやくしをそゆあし終る也

わらもへ 紫の女童

あのみ うりたなり

うとみ 蔭也

あ乃うらたら ひとん取つり

いとく 正月祓禊^{ハヒシ}なりなり也

まゝなり うしむる也

山吹がうらうらまきと 唐の綺^キ成山吹^キ及よ^タ漆^シと

こうまの 紅梅^{ベニウメ}と梅^{ウメ}もういさなり

あや^{アヤ}茶^{チヤ}椀^{ワン}及^キ・襦^{ジュ}子^コと^ト海^{ウミ}糸^{イト}あり^{アリ}時^{トキ}も^モん^ンび^ビ後^{ノチ}用^{ヨウ}治^シふ^ル

うらめ あやや

ま乃^{マノ}泣^{ナク}こ^コ 女^メ三^ミ

阿^アと^トきた^{キタ} う^ウも^モま^マや^ヤ さ^サて^テや^ヤる^ルま^マな^ナら^ラる^ル

青^{アヲ}丹^ニ之^ノ漆^シ言^{ハシ}ふ^ル黄^キと^トさ^サー^ーら^ラの^ノあ^アを^ヲ抑^{ヨメ}と^ト 青^{アヲ}丹^ニの^ノま^マら^ラ

あ^アの^ノう^ウと^ト う^ウれ^レ程^ハた^タと^トり^リ色^シを^ヲあ^アら^ラひ^ヒなり^リと^ト也^ヤ

女^メ大^{ダイ}井^{ケイ}と^トの^ノ三^{サン}島^{シマ} 髻^{マギ}名^ナ男子^{ナンシ}田^タ人^ニ之^ノ腋^{アキ}二^ニ人^ニ玉^{タマ}髻^{マギ}勢^セ

腋^{アキ}端^ヘを^ヲ女^メ髻^{マギ}を^ヲ年^{トシ}乃^ノと^ト平^{ヘイ}一^{イツ}糸^{イト}人^ニ髻^{マギ}を^ヲた^タあ^アら^ラハ

三^{サン}島^{シマ}なり

女^メ大^{ダイ}お^オ 夕^{タツ}考^{コウ} 志^シや^ヤう^ウの^ノ笛^{フエ}と^ト横^{ヨコ}笛^{フエ}と^ト也^ヤ も^モの^ノて^テに^ニと^ト

玉^{タマ}大^{ダイ}股^コ乃^ノも^モん^ンや^ヤう^ウの^ノ笛^{フエ}と^トり^リ乃^ノよ^ヨと^ト笛^{フエ}と^トむ^ムび^ビて^テ可^カ能^ネ

海^{ウミ}と^トや^ヤも^モ あ^アと^トと^ト結^{ムス}ぬ^ルも^モる^ル

あ^アん^ンち^チの^ノ袋^{フクロ} 為^タ袋^{フクロ}へ^ヘ一^{イツ}と^トや^ヤ分^{ワキ}筋^{ヅル}丸^{マル} 永^{トキ}禄^{ロク}七^{シチ}也^ヤ

何^{ナニ}過^{ワタリ}大^{ダイ}納^{ノウ}之^ノ季^キを^ヲつ^ツよ^ヨあ^アり^リ不^フと^トと^ト暮^クら^ラる^ル

し^シと^トく^クし^シと^トき^キ き^キん^ンなり

秘^ヒし^シの^ノ糸^{イト}を^ヲと^トを^ヲせ^セし^シの^ノ糸^{イト}を^ヲと^トし^シの^ノ糸^{イト}を^ヲと^トなり

ゆ^ユら^ラふ^フ ゆ^ユら^ラふ^フの^ノ糸^{イト}も^モ極^{キョク}大^{ダイ}なり^リ也^ヤ

れ^レ大^{ダイ}ぬ^ヌと^ト め^メと^トて^テ極^{キョク}と^トき^キを^ヲあ^アら^ラへ^ヘと^トなり

明^{メイ}る^ル表^{ヒラ} 是^{コト}一^{イツ}人^ニ也^ヤ沙^{シャ}才^{サイ}子^シ

う^ウん^ンれ^レき^キあ^アら^ラす^ス め^メの^ノ女^メ侍^シを^ヲ天子^{テンシ}の^ノ内^{ウチ}前^{マエ}と^トて^テ合^カ意^イす^ス

おあんよう ぼ上引ゆへり

ふれことの音 され物やここのきと一かば氣可勝と叫

ふあると但不言とみるる一の侍丸 春れ桐子へみこ

あつ油とやられるつと切くともや

心をあつて ねまへ乃こしく一や肉裏そのの試樂シカク

いづつやなり

貴きとやれあぢよ 梅花去年あ雪のあしくなりとや

うくひとあそふ 花の香と用乃たよとろくもくもろく

寫さうふ志れくもきやれ

れと 殿中や

すあしゆせく 菊サウと源の半抄ひてつゆく〜と

源詞 色がと〜の結と云詞也

わらこりて〜 花冬夜の結い初結といふと云

桐子のまれをよとのあるい一廻桐一の結と

らちとまつ〜やれらぬ〜

八乃結 されあや 一廻調

〜の結と云詞也

花のまあしせけりり 夕れりま何とせぬ人とや

さ〜つ〜一〜ま〜うとよむ心願し

はもあつ 源詞

神さひ〜してけらひ すとたる神也

あつ〜ら〜 芳と〜ら〜ひり

油のむま〜 樂若れひた〜りきたりゆらなり

あつ〜ら〜 ま〜くをつ〜成〜ら〜ひ〜や

月心のうら ぬや女目兼又うとみ〜る時かなら〜し

和あんにょう 志上引抄へり

ふれことの言 うれ物やことの言と一平は氣可勝と嘆
ふあつと但不言とみるる一の侍れ 春に桐子へみこ
あく物とやられるやい物くともなり

心をあうして ねまへ乃ことくくしや内裏よその試樂シヤク
いりともやなり

花をこやれあぢよ 梅花去年の雪のあしくなりと也
うくいそあそよ 花の香を思乃たよとくくくもくもく

驚さうふ志れくもよやれ
れとく 殿中へ也

すあしゆやく 菊サウと源の半抄ひてりけくく

源詞 きのをこのへあのかと云詞也

つらこけてうれ群シヤウもちり 八乃結 空れあめり 一進調

ハ一のをくそちきいんを群を殺するゆくる

群のあしせけりり 夕にのま阿をせゆくと也

さうりくくくまうとよむま心心願し

よもあつ 源詞

群さひらてけりひ すとたる群也

あつさうらう 芳とくくくく

物のむましく 樂若れひさくくよりまひゆらなり

あつさうらふ まうくをつらく成るる心なり也

月心のまれ ぬや女目兼又うとみくく時かなりし

源詞 きのをこのへあのかと云詞也

之乃ゆゑに かにまゝの夕暮れ初めのうぶもやもいふてい
かなるゑ

うらひの 白雪花盤シロユキハタ比綠絲ヒキナガ枝弱エダヨク不勝トクナク 綠絲弱

枝声不エダナド 枝よりたぬ鶯乃のぬれとまひの

夏ナツよりされ 不及トクナク引ヒキき

ゆくららるゑ 懐妊クワイニ乃ノ寸サチ分ブン也

とらひたる ちりさくねもーままなり

かうち乃カウチノぬきりく 史シ新シンろーみミいイと

花ハナといトいイく 牡丹ホトトギス小揚貴妃コヨウキヒとたとの日ヒ中ナカ乃ノ才サイ一イチ花ハナの王

ま揺るま

しとあゝ 明アカる雲クモと引ヒキのひヒたるまマ早ハヤ下ゲ也

もちのまをけり まへよまマ津ツさサひヒたるまマとトかめカめメ又マタ今イマ

まマ引ヒキ括クツのノねネ見ミるルしシとト也ヤ徳トク事ジぬヌびビをヲ別ワきキてテし

さサ月ツキまマのノ花ハナをヲとトさサ月ツキまマのノむムらラしシま

の考カウとトけケるル昔コトの人ヒトれレ神カミのノくクをヲとトるル

院インをヲたタひヒく 兼カミ蓮レン院イン

いイぬヌゝ 堂ドウ上ジョウ

ひヒをヲあアらラさサ海ウミをヲみミしたテあアつツらラんンとトもモらラれレ也

外ソトまマちチ月ツキ 二ニ月ツキ十ジュウ九ク日ニチるルるル也

春ハル乃ノ初ハツメ月ツキ乃ノ月ツキ初ハツメ 志シをヲさサがガめメぬヌくク也

毛モウ膏コウ一イチ刻コク直チキ千セン金キン花ハナをヲ洗アラ香カウ月ツキをヲ洗アラ

ひヒのノ群グン乃ノいイりリあアもモせ 志シをヲ合アヒつツるル花ハナ雲クモ合アヒ也

さ乃ゆゑ せきまの夕暮れ初のうぶもやいふてい
かなる

うくひとの 白若花盤ヒメタ空拂クハシラフ花枝弱ヒヨク不勝ヒツク等 緑線弱
枝声不ヒ 枝よりたぬ鶯乃のぬれとまひの

夏よりされ 不及引ヒ 懐妊クハシラフ乃時ヒ也

あつひささ ちつさくわさし ままりり
かうあ乃ゆさうく 史教ヒうみさる

花といふ 牡丹ホトギス小揚貴妃ヒメタとたの日本乃弟一花の王
を揺る

しとあ 明ヒる雲と引ヒのひさるさ早ヒ下也

もちのきそがけ まへよを抹さひたるきとかめし又今

き引格のねえりしと也徳事 ぬびを別ヒさし

さ月あつ 引ヒを討ヒげりりりり

み ねりしりも 野ヒ分れおさる

院をたひく 来ヒ蓮院

はゆゑ 雲上

ひよをさるさ海ヒをみしたてあつらんとさるこれ也

外ヒまら月 二月十九日るる

春乃初月乃月秋乃 志ヒをさかめあへり

志ヒ宵一刻直千金ヒ花ヒ香月ヒ也

ひの舞ヒのいりあもせ 志ヒを合ヒる花ヒ宴ヒ也

つくりあもせしる 秋ハ琴の音かやう 雅合しるやう

かなとるま

あきりしうゆる 秋ハ限まると春ハ限といもんる也

りすこのるより 引まよ不及也

吹あしとゆるやうより いうそのむ乃向と可切 秋を

うまふもなしくさくもみならずと尚席とふめし乃詞也

めをまをあしきふ 毛符 秋感陽氣と思男男感陰氣秋

思女 秋男春女といひるしげしを

いふこのあしめよ 源經

いふへより 息にとるぬりて 若しうりつひとさく

いふことなれを我らそつめて今を定めん

抄 卷之七 春秋勝芳回

あく乃物 曲也

里らとてはるの物ありしう 里らとて次員ハも律を秋也

日中は呂律唐ハ律呂 中を律呂と云陽をの呂を陰の

助也 後ハ律馬系より呂律といひて律を次ふすり也

春とましまりと源氏代は心丸調曲とも催る樂れりり

井のやとく呂律と律を次よするなり律馬系と云呂律

と申付るに中お倫備れお持也呂律と陽陰と用家

えと 唐より陽と云く此を律呂と云く律を陽と用

ひりり

そのこれうと 伊勢 上女成とひんとしつり

あのみく けいびとまむれ 物憂 せひしとくよも
女樂ふりさあるもあ〜〜とや不学なるやむらり
年はう〜 源訥女樂と可法^{キハフ}をま^マ直^{チカ}合^カ照^{シヨウ}もま^マん^ンび^ビる
ゆんひの母しと花神て今時^{イマトキ}系^{ケイ}のよまうと大ぬり
とひあ入り

まきぶあかり 冷泉院の由物乃と人あふ前と也
なまむけてもさと 如法^{ニョフホフ}たくとてや〜とあ^アと^トは^ハり
けふもそ乃をの 上代とまむれ夕^{ユフ}を^ヲ卑^{ヒナ}下^ゲ〜との訥也
う〜り〜たれや 一〜はき^{ハキ}けりるもるま^マととひ^ヒ〜子^コ弟^{テイ}〜
とつよひかり

わさともあ〜ぬ 自注^{ジチュ}れ^レ何^{ナニ}あ^アう^ウひ^ヒぬ^ヌ〜と〜のひ^ヒて^テたり^リひ
しにとむり

和琴 あ〜う〜なひ〜とる 後仕大^{カニシヨ}長^{ナガ}を^ヲ思^シは^ハり
わさよのむまひて^ニ洞^{ドウ}へ合^カたる〜とる^トと
おさ〜く〜ま^マし^シも^モれ^レま^マぬ 一^{ヒト}ま^マを^ヲ放^ナて^テも^モ新^ニ洞^{ドウ}と^ト堂^{ドウ}上^{ジョウ}乃^ノを^ヲ
書^キ持^ヂとも^トり^リて^テ流^{リウ}る^ルり

〜と〜と〜と〜と〜と 源氏^{ゲンジ}れ^レ也^ヤ者^{モノ}

ひも〜も 明^{アカ}る^ル上^ノを^ヲ源^{ゲン}氏^シの^ノ弟^{テイ}子^コは^ハら^ラ〜と^ト来^キ〜と^ト又^{マタ}
ぬさ^ヌり^リ〜と^ト 大^{オホ}井^イ的^{テキ}の^ノ打^ウと^ト乃^ノ心^{ココロ}也^ヤ
わさ^ワり^リ〜と^ト 我^ワ賢^{ケン} う^ウこ^コら^ラな^ナ〜と^トき^キわ^ワり^リ弟^{テイ}子^コよ^ヨ〜と^トも^モな^ナけ
れ〜と^トう^ウこ^コつ^ツ心^{ココロ}也^ヤ け^ケひ^ヒま^マ〜と^トう^ウこ^コけ^ケ〜と^トの^ノ
た^タ〜と^トう^ウあ^アら^ラ〜と^トの^ノ ひ^ヒめ^メさ^サ〜と^ト呼^ヨ〜と^トな^ナぬ^ヌた^タ〜と^トあ^アり^リ

わらわらわら乃事^ニを徳^{トク}藝^{ゲイ}を^シへし^シは^ハ琴^{コト}也

さ^サれ^レし^シに^ニ ぬ^ヌし^シを^シと^ト思^シふ^フは^ハな^ナら^ラず^ズ也^ヤ

ま^マも^モ 又^{マタ}不^フ祥^{シャウ}を^シめ^メし^シり^リ天^{テン}地^チを^シく^クし^シる^ルの^ノま^マを^シ

琴^{コト}ハ^ハ禁^{キン}也^ヤ 禁^{キン}止^シ控^{コウ}邪^{ジャ}氣^キハ^ハ心^{シン}也^ヤ

汝^ニ乃^ニま^マく^クふ^フ 傳^{デン}受^{ジュ}れ^レま^マる^ル也^ヤ

あ^アれ^レつ^ツら^ラを^シま^マひ^ヒり^リと^トし^シ 樂^{ガク}書^{ショ}曰^ク琴^{コト}動^{ドウ}天^{テン}地^チ感^{カン}鬼^キ神^{シン}

う^ウら^ラの^ノ油^{アブ}燈^{トウ}と^トう^ウも^モこ^コに^ニて^テつ^ツう^ウま^マる^ルよ^ヨれ^レと^ト

れ^レう^ウの^ノり^リと^トを^シて^テ花^{ハナ}乃^ノあ^アと^トは^ハち^チり^リつ^ツら^ラ一^{イチ}片^{ペツ}

わ^ワう^ウま^マる^ルよ^ヨ六^{ロク}月^{ゲツ}中^{チュウ}の^ノ十^{ジュウ}日^{ニチ}の^ノ福^{フク}は^ハ雷^{ライ}鳴^{ネイ}を^シた^タれ^レと^ト

と^トふ^フら^ラと^トあ^アら^ラみ^ミの^ノと^トお^オも^モい^イれ^レと^トを^シて^テひ^ヒふ^フの^ノ

と^トう^ウと^トめ^メけ^ケら^ラと^トや^ヤら^ラま^マを^シひ^ヒら^ラと^トり^リあ^アま^マ也^ヤ

下^カ略^{リョク} と^ト後^ゴあり^リれ^レは^ハり^リと^ト引^{ヒキ}け^ケふ^フと^トあ^アら^ラす^ス

う^ウら^ラの^ノ物^{モノ}乃^ノ言^{ゴン} 法^{ホウ}聖^{セイ}琴^{キン}の^ノ音^{オン}よ^ヨと^トう^ウら^ラと^トや^ヤと^トう^ウい^イ

て^テ洞^{ドウ}あ^アら^ラひ^ヒら^ラと^トや^ヤと^ト云^{クニ}は^ハ瞬^{シュン} ち^チれ^レく^クに^ニ言^{ゴン}乃^ノ一^{イチ}た^タ

う^ウら^ラひ^ヒなる^ル也^ヤ

あ^アの^ノ國^{クニ}お^オひ^ヒえ^エ 婆^ハ羅^ラ門^{モン}傳^{デン}は^ハ始^シ末^{マツ}也^ヤ 但^イ元^{ゲン}恭^{キョウ}天^{テン}皇^{クワン}

又^{マタ}我^ガも^モ彈^{タン}琴^{キン}あ^アら^ラと^トと^トう^ウの^ノ唐^{タウ}へ^ヘわ^ワら^ラす^スな^ナら^ラひ^ヒ

一^{イチ}た^タる^ル也^ヤ

と^トう^ウぬ^ヌむ^ムよ^ヨ う^ウら^ラの^ノや^ヤう^ウけ^ケり^リ 遣^{セン}唐^{タウ}使^シの時^{トキ}は^ハ新^{シン}羅^ラ國^{クニ}

と^トう^ウに^ニ事^ジ也^ヤ

あ^アの^ノや^ヤと^トう^ウの^ノ 何^{ナニ}も^モぬ^ヌお^オも^モな^ナら^ラぬ^ヌと^トい^イふ

あ^アら^ラす^ス也^ヤ

うれうとろくろけりもるれそと也あはくはれもく
まあまーとつり

鬼神れみこ 藤原香の楚江臥竹叢多涙不収真把世絲

写離おぬを以鬼神怒 聴琴水願 一二の句ハ在

まひーを神三乃句聖 田句ハ感する心世縁を琴之必

別離の町なひまう鬼神はとこうんよとる

ふつすとの 大事なるふつうて聖まくれくる物

まはくく致と云款を付くるとなり

うらまれまのふ うれりーまゆりるあ侍受る款まと也

をの申ふろくと 後唐打やして琴を習もあ戸とひの

みころ扱と也

ちく魚一もてを 一曲けりりりとなり

あくふけくそふあ

日本見目錄 菘原佐世撰 樂家 吹三ア 百七考

琴經 一考 聖操 三考 曲心也 琴法 一卷

雜琴譜 百廿卷 樂圖 四考

師とす人々 我引琴てりくま又し師も不入物也

れありまその人 上代此人もあ不及と也

つこも高へきすまもなれと ぬるの女所乃仲腹代文乃

所るりともふあ〜んり〜也 今も誰も侍受ある極ま

人りか〜と也さるる大おの惜〜となり

ろと うれもる 源訃

二れまのりより 式尸のま白兵部つままたいふなり
めの中まの内版 めの上感後なるる

う人よゆつり 雲上よ也 源氏よん和琴のまじり
うろくまのまハ 呂也律る成るる也

つろくまの寺れまなるややまのち乃やけりなる
也二後江の紫井よまろ玉一はくやまら玉ま川く

くやま一とむとま一とんと三後まのして八國そあ
つんやわつらんくろくませんやま一とむやま一とんと

江乃紫井 清也 素ハひ一くむる也 やんと
ままのや一もや日ゆらんらうとみまんを留せん也まの

し玉をあらうつんと 祝ま乃むまを今くひぬへり
もくまの 明の上 志やうむりよま也

申の音 曲れ音 ゆるなるる
これ成てはくも 雲上

まん乃て 條説乃心死 條時とまむ也
うぬりや 呂る律る成也

まんるまのの 琴もケ調 檜平 片島 水守 磁 釜 海 波
鳥鳴調 五ケと胡笳と云て 莚葉と巻て吹とまらむケ

可用
又六のまら 樂人も不伝とまら一変の傳也

春秋より後つの節よ 時にまらこのひ事 不あれて 御のま
はむはくひあるまらうわがみものり

あの志を 七八代に人になり

再とらぬ 物の言れり多まへにむすむらうく敬と也

はら乃笛 玉歌鼻の版

あけくまを 夕霧乃所子へも雲上より也

清ふをたてまつる 女三之乃源氏へ命をくはく也

清く人く 清源より乃相傳也

志をたれぬ 雲上となり

清く人く 次

院をたれぬ 雲上より人へる也

う人をとまり 雲上を女三乃所子にまへまする也

ううさく うたひりや也所くよみ也

文乃清く人 源氏討はれめつるを雲上の志

くくく 別事 女三よりとる也

さのし ことあらなり

てをくく 志を也

ひりよりのぬ 雲上切出れ所時の事

あやうれすら 清持乃く又の名姓志の所子にあら

くひの志 女三よりとる也

く 具しし人ハと也

くくをた七 源氏十年をくるところ 志をよん七

けりりのいもうとくみゆいさく 世七女乃志をた

あたまなり 大は事也

十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

こ僧部 小山僧部 今始てなり 成始ふとんゆ

まのうらさ 源種

うれしめめを 次六のる 薄む委上かやも 可合うれお
りて長命なりと也 世上を 願取乃 理びり

その一輪 ひと入 源との別也

まきれとつひ ぬけ入いふ思事きあつとまき

れり ちるや 自为れる 歌のり のこなり

このま 女と

歩みつうのうへ 自为乃 上よを 理まき けく物うや
のゆふやうよ 世^{ノミ}上言

油なけり けり 源れふ 前心ふとの思ひ乃 ちぬり 初

と成て ち命こ也 ぬけ 油のりひ 油しを ちのりひ け
既 芝 け ちのり又 詞也

ちうまうかま 世 けい ちひ ぬきと也 大危^キを 不^レちり

不^レまてとこや 世 せ ぬ

うれり ち 源 終

何となむそ 歴^キこくしてめい^キらうま^キ入も ちなくと也
おゆ^キら 源 ち中 多ふ也

大の母 委 委上りのめ ちまらふのこも 委上りのめも
ちう 秘さひ ぬすくく ちくこし 源の 悲^キおも ちり
つうと ちり

ちり 賢学 名 玄 女の ちり ちり 又 いの ちり ちり

そはゆりてつしきまを乃ひりちと死
人みしおろく おとけぬむと也

乃乃あそくしき 源の年あおなりしむひよろくを

コウカク 佐後梅しきましきなり

けお人ろく 前坊れ女はるると也

中一交をまねつしき 中文は成ゆ人言弊といひぬろく方

人乃ろくしきまを思て源の流をのちと也

ろの世なりし 故世まをまなり

肉乃所切この流ろくしき 明るよ

こと人をみ祿を 芸上経

たといふれ あまろくしきまを思て源の流をのちと也

おのるれは流ふろくしきなり

女流ハ 女流ろくしきを思て流すろくしきなる女流ハしきまをなり

めま流しとむとま 的るよハ芸上人ハむとま流しなり

と女流ハハむゆへとれけしめまなり

悉くろく 芸とろくしき乃ろくしきをわくして人よまろくしき

流ふと流と也おくれろく流すくむとれむよやくろく

そいふんとお討ハむとむれろくしきをわくして人ろくしき

めいひぬなり

二すろく そましくよ也芸乃むと源の討にあつて

いしきろくしきろく 神ろくしき也 慶嘉しきろくしき

わまはむとく 女二乃流し

心ゆり發ててを 師ふんむれ終てううむとて

とて

ふひのむと ちひしきゆへる

世れたとい 雲のむか

ひりりしつとも 大かこお物種なとふあつる

つ井よりゆ ちかぬあを名よりうたて進後てもはぬに

ふれきとありてふもの 河の事可流に

げふ乃終ひける 源れ流後しあともくせ可流とを

伊ひまゝ人乃志のひしくくする物ねとてカミン謀思と也

流力もぬると 人志進ぬりの思人より何とぬぬハ力と

登めらみして行さかゆらくれ

ぬ流の流しつり ぬるぬ流乃流方りりのたふり

源へ流終るなり

流り也 源氏へ系うせんとも流らんも不六る

そこ所とも 流胸ハナわけし流事を時とよて何事やの

かれ事愈痛お也とくも物モノを又たゆそのふしとる

うのぬん 朱雀

まごゆらしと流 雲上か家乃る也

人ろとて 家中を紫一人あふ人けまやる

ちやくしつり 女流内へ系り流人と雲上の詞

わの文の 思流ひるんとあまて白丸 永正九年又十

又差書か一の文れるりなるうしと流又上となり

ゆゑにゆゑに 源詞

とてとてをろま スニメハコラニ 小取守小侍 オホカウニヒラニ 大守大侍 オホカウニヒラニ 大守大侍 オホカウニヒラニ 孝經 キウキョウ
きうなる人ハ久し キウニ 老子曰 ラウジ 柔之勝剛 ニウハカウニカウニ 齒先 キウニ 剛 カウニ 後 キウニ

天下莫 ナニモ 強 シヤク 於 ニ 柔弱者久長 ニウハカウニ 剛強者折傷也 カウニキヤクニ

天下をとも毛までとる也

ゆゑにゆゑにの人 時を異にする人也 尚云は就類也

おりの事うれまぬ 水方不定也

二文とるん 女三之乃 子 婦之有子也

もやより志みしる 女三

なはらぬしをいふすすて しくはらぬしをいふし

む用也 子治ゆものき 我むくさめしむし

しなやとすすておふ照母とみて

とゆ後とりおのころひ人もまの

ゆ後と云 女三のま乃めれとの娘 イメト

もやくと云 梅乃とく縁考ゆ人す結する

おりのいをけうめしるも 政

院乃くしふ 兼蓮院へ女三れまの事と人乃尸なり

又源氏れむとをゆふよ コト 梅志結ひてむしーらん心 キ

平人き心交りらんと兼れれ コト 結すと拍傳す

と也 女二ハ落致

ゆゑにゆゑに 女三 け惜くもを拍心申しゆしと

ひみしあへいひのしとくしとるを可しむ

とんりくはり

世よけにけありきぬ 史源氏とや

かきまうこ 早下とくはや

物ふゆらぬ 日のおん人のあはれさつよひのせとれあき

あうしそ 窮くくひれく

ふゆいひりく ありくもはくとも司也

ましのあのみ得ん

あちりくの中く ありうひておひのまをら

ねりあるも ぬいけちゆくあ

此事やや汁とと拍とひとたり

みそとあすとて 改院乃伊禰毎年中午日也

まはぬ目女唇を赤くきくぬ也 袖袂はふりり

ハ吉日撰ゆふ夜定日なり 毎夜乃を中午日る

上臈とあぬ 袖縫く叶るり

阿せらの 女三河道所ある女唇也源中おのちり

人源中誰ともなり

さぬても 双批判 ぎねまてハあまつ

ゆりのととよ 祿とらちとたりとみ也

床さつ三尺鬼乳不及也 養生抄もこ也

りすあし祿と 拍詞めいしとあうともましと思ふ

ひりりくしそ 中くくふくひてなり

院くしと 未雀院

うこ卯一 拍むをううのせりとなり

きれうめて ひよ割しうめてり

つこまをま 寒よりをあしと也

ひこあるまゆじを 文をたぐりまぬむぬ

よ雨のちひやうと 拍む中一尚と承まても到まりても

ひまのうららんと思ひしを清力うとりてを人ら

のまとなり

わくわくして 業平二条を具しきりしうりなと

るいさきり

てるし志ねの のかお癒せれ相也

何しおなてまらり流らん 愛中一れむ文よならんと

思よ又しつこまをまゆりまむぬ

れりお母あく 何やれむむ也

院を源氏 女三乃ぬむ中

人の後をゆく 下官菩提身娘子拭 花仙窟やいのれ

扱事一むり

ふよう 不用也

ころひありまら 命のちりなり

うれよく魚けつとも ぬむゆらし流るよ力とる也

むとなり

愛ゆらまを 指乃みし一愛代葵をゆりと也

きくらのほ懐妊しや

おくりまゝに 指れもとお祈りぬを女乃心の中也

まつり乃目 蘭目也

女志こも 落葉也

女やうこそ身 摘と罷りて 犯也

林乃ゆかりしはまれあををいなり

女文のく 落葉 何とやらん物ねりやうの

こもひまぬ人里

今ひとまゝし 女とをきてしうれと思へり

毛後うつら 乞りの落葉と号は受持のさうハ兄弟也

わら葉を二まゝに比してなる也

ゆゑおめけなる志望うごも 双也

太文と祈りひれと一まゝと云ふ

りのぬん 二急院

まろくく一交 曲字まろゆる心也

めーあひめや 向心とたあてのきりうらなり

あまりあろ 大般若經云 定業亦能轉

不動尊れを女の 善之畏之截師欲滅弟子為受灌頂者

長行流蓮受灌頂を故於延命之事をす 不動尊の中也

六ヶ月延と云ふ

とまのぬへる 雲乃心せう也

てうきうれて 獲らるれられてなり

月比てうー 物の氣乃詞ましくよてうきうせうなり

調虎の心もあつて

れりしきもせん 禁よとらふこと也

ひたこそゆく 浄息ぬれりた力もくひなくし業

ひんこ

とぶ連なる 祖

タラカストヨム

わりの方より 物の氣乃ち うれはうとを

源氏ハ 志強へこと也 瞬

あとのふ 夢巻の中 物のあれもらうとを

るこそふ成ゆれし 生前死後し心のちかた好中なれ

事さうけりけ連せ化せしてハ子のよとを思ふこと也

心乃志 執心 トクシ 一念、念ぬれは成と也

あゝはよゆす 禁よと強ひり事とたり

もふさうへし人とも思ふと 省今 シヤ 家もともなり

みの心也

おぢりひし 一念乃り来とたり

ゆくいみま 靈 リキ 一 トク 念とるを

前せも也 ちつゆくも心と也 不せもて叩 ウチ けり

死 シ ころとたり

海よりつとく 仏神又源氏死声よふやりのそ不空

とたり

り今を 志強と強也 大般若經 ニヤ 淨観 ヤキ 煖 ニヤ 損 シヤ 邪氣 ケ 之

由 イリ 猶 カ 荷 カ 的 カ 神 カ 志 カ 真 カ 崇 カ 法 カ 師 カ たり 見 ミ 延 ニ 長 カ 八 カ 年 カ 李 カ 尸 カ 玉 カ 記 カ

秋文ふれもせり 秋文案已経内七云 佛レ經カミ塔アウキ

寺コト 香カ炬コ 僧カチカ尼ツクメ 女メカシ 思オモとトもモいイむムとトいイふフとトいイふフ

もそるふむとそと乃こそなく 秋院乃法祿

かんどしとめ 對談也

ゆくうせ けさお経事と人不足れ

らふ乃のるさふ 夜夜祭 昔ハ改るをかへるや

あくる日改さき一なり

さいつひん 意の光と一はふけらうはぬあつとむり

何とゆくくに まてとつふらうととまる物たつと

さふとさくふれりひまきま

秋文 女三

りとの古れ海と 秋對れお母是は成行とんとさる

何の愛せう 秋なくおそめたき極意はたのうと世

くスーのつとみ

秋のつとみ 業上又文

大羽の老 夕若

ゆくしき 拍鐘

ゆくしき 夕詞

ゆくしき 源經

くしあしよ わさとの今のゆえ藤乃礼象をあらんとさる

ゆくしき 乃らうらう 宰サ默カクへヘとトらラうウとト云

きを入らうと云と云自由のあつぬ事ハ不フとト云

不計の言泰らうと也自由ありハ美なり河をせしん
何らんともやばしきその詞叶あり

けりまきりた 腹心むしりまのしき

うりー人そふ 伊豆のり

このおつこを 源乃内心

おろーつこゆのさ 温盤経之文 一願三干男男子

徳煩悩合集為一人か人為業障か人地獄使

能く弘雅子外而似善障内心如夜

五ういけり

あはれ文

又戒若乞優婆塞

優婆塞女

源氏れ念し源人

おろーつこ 雲上の枕のけりま

おろーつこ 物氣也

かたやうる所 雲上れせの心申すも源乃めまと思

る海とふとんけりてゆゆたこふいゆとなり

ゆくとうて ねあやーけり

大桑院よりありき後 雲上絶入路ひ一時のまゝる

まれやうよ 柏女三より又まのうひし事まし

むとーくこふ 柏と源也

めさきーう乃と 女三系年より源もれ路ひ心

ろー 柏と目さぬく心也

表げらぬくせ 双比

みこてまろりともめて

クワイニ 懐妊を察する

所ふやま根 女之の懐妊を察の不安^{フシニ}してつふおくひり
わこる路 六条院へわこる路とらふていま二條院乃
る^{クワイニ} 懐妊なり

めまをあつくと 崇上

あまお白く さとまきくとも 夫が

白^{キヒリ}髪 揺らぐとひんま 女まやの書

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あまらるる院れ 二条院

あの人 拍大事之刻又拍性也

まごころとよろい 雲乃所

ゆめい 戀く人魚中一ふまゝのまじり

月待つとも 夕やまをたたとくし月待つてうぬれり

うせころれまふもみん

夕あよま 女三つたこの神をわいせと一也とるる

待つともま 二葉院を待つとも

まのむら 二葉院ともと出づる人

よへのうしかり 今乃世も拍扇をも 蝙蝠^{カウモリ}をきて扇

よのうしかり 花凡ぬるまゝと拍扇とつよ
るやそれをいとしめてくしかりとつよめ
りて

かひと求^{モトメ}行るる

あまの海らひる 万は乱^{マヤカシ}字^ジ然^シも

鏡打空用て 源氏れたらんすうまよと世と思入る

めまのやま 小侍返の心

すあーありれ 別也

あまのりれいと 小侍返ちのくあるふもふもあは

といみそとがり

いとよ 文よと拍ふ程ふとるる

あはくはのハ どれのあしんそと也

人あのみしきせ 鞠の内拍う也

あくまてあひい 女三乃志をけあはて鞠^{マド}の庭へみし

ひーにまきてわきてせ先返ひーとるるらてもあひあ

その人 拍大事之刻文物性也

まごころとこころ 雲乃神

ゆめい 嫁く人魚 不世の恋なり

月待てとも 夕やまをたたとくし 月待てう魚れり

うせころれまふもみん

夕霧よき 女三つたの神とあはせとあやとあや

待りともあ 二葉院を待りとも

まのむらき 二葉院ともと出づる人

よへのうしかり 今乃世のお蔭を モツアツキ 蝙蝠おと見て扇

作始とる

用めらくしそ 橋扇やうしかりを モツ 束行るる

さし海らひる 万は乱 コト 字次よむ

鏡打空用て 源氏れたらんすう又よきと思入る

めもえやも 小待後り心

すあーありれ 別也

あそかりれいとを 小待後りあふふふふあふ

といみそとざり

いとこよ 又よとあふ程ふとるる

あはくはのハ どれのあふんそと也

人あのみしきせ 鞠の内拍う也

あくまてあひい 女三乃志をけあふて鞠の庭へみしあ

ひーにまきてわきてせ先流ひーとるるらてもあひあ

Handwritten note at the top of the right page, partially obscured.

らしてさかむらりしと也

おまはるゝ 女三乃御むれ月のく〜とあなづりて

おのふまゝふや〜と 双比

おのふまゝを 登りきとこゝをばらぶらぬ病とととと

てとほ〜く女をぬきつり

の甲細き 拍今中納言也り 拍のまは乃風流ハナ

あふりしと也也

昔おやうよ 源氏乃信为上とあり 流六巻と勝月カトぬれ

の〜 あふせるま後の川おなやうあふりぬ

あふ〜とあ〜 城見終ひて拍とととと〜ぬり

ぬら〜きと海 懐妊クダニ也

まの力なりしと 源我を〜ととと〜なり

みりとのゆめとも 五條后 又徳 二条后 清和

まのつとつひて 女内后と同女中シノナなりととと自給シノナれ

むまもあふとなり

又なれと海 女三を源乃とて〜なりととと

みの〜とま〜ぬれと 帝まの〜と物〜の流病と也

孫ノナとと 孫ノナ直ノナ云 孫ノナ後ノナとととと也

我なり〜と 源と並て拍へ心分ぬふ〜とととと也

右院の〜とも 相壺のみり〜なり

また山らしき 月のけりりま乃山流の〜とととと〜

入ぬる人可やふらん 瞬

女表 雲上 雲は清^きくると云ふ心なるこなる入つて

己身ふて人わらなうも女とを思食うなり

ひちり〜 雲詞

肉よりきけひく 女とのこへ源乃とろのふち

肉又あ〜とけり

あまこのけり 肉又朱雀

肉れ〜 雲詞女との心なるとる

わきされり 女とのこあ〜 絶れとる

と前乃女身前打とまひ丸

けふあれうりに 婦の思人あまよ前〜 けりひありの

〜 せんり〜 心ふり〜 くるよきまわつ〜 けり〜 國王

凡の心を思計き浅事〜 とる

けり〜 源

わ〜 源と源と六条院への〜 けり

て女〜 とせ

日はぬぬ けりのけりてけり〜 けり

今ハけり 源氏乃ゆき昔もけり〜 けり

院とを 朱雀也

あよめけり 天取と云 云と云

あさ夕 夏乃目もお夕凍とま物とがと我意の〜 けり

ぬらん

か〜 けり

れ〜 けり

この源は

為のりつうふ 表ともいふ 望まふ人をばもがまを力の
いづつうは 越ぬてまうれ

りてやまのやの 女三所を今思也

まんのもたてまうらふ 双

まうらふ 小の徳はく 徳はくやあまふ人知と如何と也

まをやうとも 指の心次討つてまあふらう

まをゆとらうとあふらう源の源心

この源事れ 懐妊の事也

あはれひはれち 源乃女三とねのひはちちちちち

あはれにかなむとく又わたりぬる

この源は海をぬれぬ 花三三位 恋一この源はあはれ物すくも又二たひと表
まうらうてあふらういすく二ついとをまうらうや
あはれにかなむのちちちわんわん

いづつうは 双

女源れあはれ ぬる中まらうとを思ふ人

うらふあけぬ 芝地ふ別あう人よまをまうらひおやままぬ

とたり

た乃れとこれか方 玉うつらう

おらさむ 源の心次つを思ひ也

あのかとこの せむ乃年一 舞名 舞名 心をあてせし事也

ゆらぬれとる 源とる也

舞あうち申るまけまハ 舞と玉と舞りつうは申るれ

この源は

源乃のついでに 哀とよみの妻よ人をたはまがきて力の
ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ついでに

ちいさな

三三

もひと玉のかけけひらきも向しつらへたれと申
きれてもれ^{キトラ}持と也

ねりしと 女回也

二条乃内侍 勝月夜

るの勝心よそも 女三夜勝乃内心よも女のろまひ
よむりひおれぬるり

つ井は所不つ井の事 源が家なり

つ片るんと 源出家乃まを源へ去らせりしきれ
ぬ事なり

阿まの母成方 源尼よ成所あても余^{ヨシ}前よきりしるりの
を源へへの事 源ゆへとらちぬるり

源一すそひやも 源と思ふをけしんるるる

とくねしとち 源れ^{サヌケ}婿なと也

源文のとらめ 源起るもぬきまきしゆへるる

とくまぬと 源はまれせりハ文の詞 源の源文まぶ
うをそとくねととらちぬるり

あす舟よ方 源を明る上おひる人の事きし也 ともれ

ねとのねふらんともちて我ゆへともさるるゆへと也

あまひまうこもくと 法中門ともまこつて可然れ

二心あつとまこ 二つ面白詞也 教ひ^レ切法善及控

一切我身存せ^{カイク}共^{アノキ}佛道善とわひひなり源氏乃

むり^{エカウ}とらち向ありてもつと ね勝心也

妹を中も 彫月スミツキ被れ又と 雲上クモノカミのみみせぬへり

とてわらるとき 出家イデオしぬふゆへなり

新院ニウインと 撰センと 彫月スミツキ被フとるわ

汝ニ泣ナクも 撰セン危ヤブに 成ナリぬふるし 初ハジメてこそ

の人のれ 撰センるし ぬすへんハ ぬれとなり

とてしうあまた けしとくろし 女子コノメ又男子オトコぢやうも

ぬきくよりら 珍メダカまの事コト時トキとて 遠トホ年ネンゆりし

つとて 切キレのつとて 頼タノシハ 湯ユ子コ女メと 歎ナガメぬし

つりまを 今上イマノカミ乃ナラバか一文

みこころ 惣ソウ而ニシテ西ニシ子シ並ナれるしや

とて人を ぬれぬし 平人ヘイジンハ ぬきぬき事コトなれま

平人ヘイジン乃ナラバぬきぬき事コト也ナリ 又マタ遠トホ年ネンゆりし

まと平人ヘイジンと ぬきぬき事コトなり

えりくし ぬきぬきの 雲上クモノカミ詞シ

つりぬしとて ぬきぬき 命イデも ぬきぬき事コトなり

ぬきぬき事コトなり ぬきぬき 命イデも ぬきぬき事コトなり

とてぬきぬき 双フタの 地チと 雲上クモノカミの ぬき

ぬきぬき事コトなり 彫月スミツキ被フの 女メ存ゾク前マエも ぬきぬき事コトなり

まはまゝ 裁カるれしやなり

ぬきぬき ぬきぬき 裁カるれしやなり

六条ロクジョウの ぬきぬき 花ハナ也ナリ

うらりしや ぬきぬき事コトなり

はくそ雨 浮物雨 金銀細工の不成へし 潤度たや初乃
路をひうと遠いゆへ 不立也 但るをわじしそまうつめ
を月を大お 葵^キ月 御夜夕暮をりちり

るう月 あれたん乃女沛 悪后

ひめ文 女三

うれ月もを 祿之月小落^キ乃之来雀此夜をめさるゆ也

うん乃志 来雀へ拍末ゆへり

病後文を 拍折

まおまへて 女三文

ゆとくまへけり

あまーまき^ス建 登上^ス病よ海さけり

はつ^ス中^ス 来雀也

けりくまへ 源此女三へりてまぬるる死りて

よし^スま

ひん^スさ^スと^スや 不立也^スあま^スつ^スん^スと^スなり

内^スつ^スま^スや 来雀の心世乃人の禁中^スふとの事

ま^スつ^スひ^スさ^スん^スと^スや

ま^スひ^スと^スす^ス人^スき 風流 あなうり美事^スなりある

ま^スひ^ス花^スみ^スや^スいと^ス何^ス伴^ス物^スゆ^スあり^スひ^ス物^ス流
ま^スあ^スま^スあり^ス日^ス中^スに^スい^スれ^ス染^スま^スり^スみ^ス
ま^スい^スま^スあ^スり^スま^スり^ス又^ス人^スと^ス無^ス垢^スま^スり^ス
ま^スか^スい^スま^スり^ス何^スの^ス内^スわ^スり^スま^スり^スの^スま^スひ^スと^ス
ま^スも^スみ^スや^スつ^スい^ス人^スま^スり^スま^スり^スの^スま^スひ^スと^ス
ま^スの^ス何^スら^スと^スま^スり^スま^スり^スの^スま^スひ^スと^ス

の事^ス小^ス内^ス人^スの^スま^スり^スま^スり^スの^スま^スり^ス

源

Handwritten notes on a small paper slip at the top of the left page.

清く之雨 浮柳雨 金銀細之の不成へし 潤度たや初乃

始ふひうを遠い切く 不立也 但るきぬじいそまうつめ

を月々大お 葵^キ月 柳夜夕者をりらなり

るう月 あれたん乃女清 通后

ひめ文 女三

うれ月もを 神之月小落^チ乃之来^キ崔^{サイ}此^コ夜^ヤをめされく也

うん乃志 来^キ崔^{サイ}へ拍^{ハク}系^{ケイ}系^{ケイ}人^ニり

病^{ヤメ}清^スき 拍^{ハク}系^{ケイ}

まおも入て 女三交

ひこくろけい

あーそま^キ建^建 豊上^{トヨノカミ}所^{トコロ}病^{ヤメ}は海^{ウミ}きけなり

はたすの 来^キ崔^{サイ}也

清くくまを 源^{タケ}女^メ三^ミへわくま^マ始^{ハジ}る^ルなり

よしき

ひんがきこもや 不^フ立^リ也^ヤぬ^スき^キま^マつ^ツん^ンと^トなり

内^{ウチ}わ^ワく^クま^マや 来^キ崔^{サイ}の^ノ心^{ココロ}世^セ乃^ノ人^{ヒト}の^ノ禁^キ中^{チゆう}系^{ケイ}の^ノ事^{コト}

ま^マの^ノひ^ヒさ^サら^ラと^ト也

ま^マひ^ヒを^ヲす^ス人^{ヒト}き 風^{カゼ}染^シ あ^アな^ナう^ウり^リ美^ミき^キなり^{ナリ}ある

ま^マい^イよう^{よう}を^ヲ愈^ユ乃^ノ情^{ナリ}系^{ケイ}の^ノ事^{コト}小^コ所^{トコロ}人^{ヒト}の^ノ志^シ程^{テイ}こ^コよ

伊^イひ^ヒつ^ツの^ノ始^{ハジ}る^ルなり^{ナリ}ある^ルと^トなり

い^イみ^ミち 子^コ乃^ノみ^ミち^チ也

い^イや^ヤく^ク切^キく 源^{タケ}心^{シン}中^{チュウ}

Small vertical text on the left margin of the left page.

おもすにぢりひ 不^フ慮^リ有^ルなり 源^ノ詞

くららひて 女^ニ此^レ神

今^もも故^に 女^ニへ 吳^イ見^ミやーと 思^ハへと 兼^ニ崔^ノの 心^ハ乃

程^ニを 言^ハと 祈^ヒひて やーと 也 一^ハハ 兼^ニ崔

心^ハよ う^じく 是^ハ 女^ニの 心^ハ乃 心^ハは 源^ニ此^レ 肯^キんると 也

あ^くに 兼^ニ崔 山^ノより 心^ハ 吳^イ見^ミあ^るふと なり

心^ハこ^もき^くなく 分^リ別^ルも^る兼^ニ崔 一^ハ人^ノの 心^ハよ^なし^きは^らふ

女^ニの 心^ハ乃 源^ノ乃 吳^イ見^ミな^らひ^を乃 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 一^ハし^めす^人と^さと^ると

心^ハこ^もき^く 源^ノ兼^ニ崔 心^ハ乃 心^ハ乃 心^ハ乃 心^ハ乃 心^ハ乃 心^ハ乃

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔 心^ハ乃 兼^ニ崔

おひとれ 若き源の人乃西の〜とや〜小公又の
やうの事乃始おとなり

かありて事 扱方よ西の〜事〜を 今方よ
とる事と〜や

二文彦宗

このあけりるをし 拍への起るなり

ゆるめり〜は 懐妊^{クハシ}なり〜いひはれと後へゆへこと也

早下也 ^{ヒダゲ} ぬぎぬ

数月を 三つ〜ハ源の又桐壺^キ月^{ヒカ}は米のゆたあよ

と也 晴花^{ハナ}小清^{コハヤ}字以下六つ〜やありいひ

やも〜む びつ〜〜や

何とぬ つのぬうれ時り〜なり

みん〜もても 源の心を拍れかま〜〜みんと也

源の心

ぬや〜つ〜 紫上女三ふとのゆれ拍な〜も今其れ

きと世上の人をわり〜也

す文相を 拍也好又仁ハキ〜ま〜し〜思ひや

ま〜して思ふぬ相そと夕の心

猶^{ナカ}乃^ノ是^シ〜〜

女河の志も 六条院よむ〜なり

このたひれみこを あく句交 意とをま〜りなり

源氏物語乃足板也 ま〜り〜た〜と〜相透晴花^{ハナ}〜

互て 不_レお通

まきく 次_レ也

され_レうのひ 些_レれはよ_レうひなり

てう_レやうのやうみ うり_レなりし

の_レは_レや_レさ 花_レち_レれ_レと

れま_レ人の_レ相_レを_レ見_レぬ_レる_レひ_レ句 染_レ門_レの_レあ_レる_レと

花_レお_レ里_レき 源_レ乃_レれ_レま_レ人_レ乃_レハ_レ見_レぬ_レる_レぬ_レと_レ也 瞬_レる_レ一_レふ

叩_レ一_レ如_レひ_レみ_レま_レて_レは_レま_レ不_レ入

ま_レつ_レれ_レあ_レら_レの_レま 拍_レと_レ源_レと_レを_レ無_レ痛_レ心_レ涉_レ中_レと_レなり

只_レと_レの_レさ_レぬ_レれ 好_レま_レ乃_レる_レに_レれ_レく_レと_レ也_レ可_レむ_レか

女_レ三_レ又_レ中_レに_レら_レなり_レと_レお_レ付_レて_レも_レなり

予_レれ_レこ_レと_レく_レお_レや_レを 源_レ種

み_レこの_レほ_レう_レ一 女_レ三_レ又_レ乃_レ院_レれ_レは_レ賀_レの_レり_レ年_レも_レせ_レ免_レ迫_レ

い_レは_レ井_レれ_レは_レ絆 後_レ中_レ多_レ院_レお_レとの_レは_レ幸_レれ_レ茶_レお_レ之_レ衣_レ一_レ絆_レを

お_レて_レひ_レと_レる_レと

家_レに_レお_レひ_レか_レる 源_レ氏_レ乃_レ子_レ孫_レ一_レ家_レれ_レ事_レ

そ_レれ_レし_レは_レ後_レせ_レめて 殊_レを_レ習_レし_レ事_レを_レふ_レも_レこ_レん_レと_レなり

月_レは_レ拍_レ討 瘰_レ癧_レ り_レん_レを_レん_レ乃_レ也

み_レこ_レま_レお_レく_レひ_レや_レう 肺_レ病_レ血_レ氣_レ乱_レて_レ癩_レ癧_レ也 肺_レ氣_レか_レや

な_レら_レし_レ踏_レた_レけ_レう_レと_レあ_レる_レ討_レも_レあり み_レこ_レり_レ也_レの_レ病_レ乃

あ_レら_レる_レ也_レ

あ_レう_レう_レり_レを_レく_レけ 女_レ三_レ又_レ乃_レ院_レれ_レは_レ賀_レの_レり_レ年_レも_レせ_レ免_レ迫_レ

皇孫藤原永成子孫監而別尊立方之終生樂也（イハレニシテ）

一々を事よ方を終らるとして之程の窮小（コト）を考ゆ也

はく雨は 彼仕の愚者きん前ふれとたり

とよまやまひを 来へ拍案しんとる也

ゆのめしとるしとる 来乃涉（キライ）嬉と也

いのめしとるしとる 来乃涉嬉と也

だてをきしとるしとる 来乃涉嬉と也

とるしとるしとる 来乃涉嬉と也

とるしとるしとる 来乃涉嬉と也

とるしとるしとる 来乃涉嬉と也

とるしとるしとる 来乃涉嬉と也

拍此ハととく志のらぬと好ゆふといふも源此也と

されしとらん花女三交のゆかりとてとらんを
とらんもるれやとらん拍本のゆかりとてとらん
してとらんえゆかり

一やおもとらん城なり

りともり一ぬぬ 拍と 塵（チリ）の討死

大拍 拍と録念までとらんを人道の若きわの流けり

大しとふとらん 至とる也

ひんりのれとらん 花女也

ねこまひやふへ 拍（イハレ）也

けふあのみちを 拍（イハレ）別ありとる也

あのみちとらん 承平七年陽成院十夜舞臺

五人服素白襦袍ハ蒲團の下敷也

凡そをあらと云 綱系此日のるりなり

即一人 三十仙人強^{カタル}腰^{ワカ}合^カ元^ノ敷^ス角^ノ管^ノ弦^ノ琴^ノ 章考標^カ世^ノ若

唐人

せんゆみの 仙遊處

言のやまを 冬^{フキ}の^チ際^ノ乃^チち^ノり^ノけ^ニま^シ中^ノ陸^ノり

そむはちりけり

お乃れとく 舞臺

共アハ 雲

おれ大との 舞臺 万歳系

源中細々 式アハのまれば縁なり

まうまう

らくそん

あしまたの 縁^{カニ}の舞臺^{カニ}一^{カニ}路^{カニ}へ^{カニ}

あらし乃りん 源

あいな兒 一^{カニ}あ^{カニ}兒^{カニ}と^{カニ}い^{カニ}ふ^{カニ}ま^{カニ}の^{カニ}より^{カニ}酒^{カニ}乃^{カニ}と^{カニ}て^{カニ}醉^{カニ}り^{カニ}ま

すうそまゝてあらし

染門猪 かりとむむとらめあふなり

あのをあふ とうとあふ 一^{カニ}年^{カニ}を^{カニ}ゆ^{カニ}の^{カニ}ち^{カニ}と^{カニ}ら^{カニ}も^{カニ}あ^{カニ}ん

すまゝによまひやとらよりのるはと

今志り一^{カニ}か^{カニ}し^{カニ}と^{カニ}を^{カニ}拍^{カニ}を^{カニ}や^{カニ}う^{カニ}て^{カニ}年^{カニ}よ^{カニ}ら^{カニ}ん^{カニ}と^{カニ}が^{カニ}り

おあひと 源

もいせがし 俗鏡^{ソクケン}のけり

志いふもあゝぬ哉 拍上がかりるる

あはれかり 氣乃あゝぬなり

ふれくもて 一葉文 落葉まゝり拍と後仕へり

路ふなり

りてまゝと 拍乃心 切り初れ終のひちまゝあひ

今そりまゝ乃門出るるなり

をのあゝりて 落葉母れ詞

又母より主婦の中へとがり

ことりまゝや 拍也善詞

とまゝりあゝき 拍命のるるをりり

落葉まゝりき 女二をまゝりき後り終りしとせ

あつらんを 拍母詞我小がとまみい終るぬとがり

入よりき 拍嫡子

りて思ひて 拍末終るも思ひて落葉あなへりり終

へとがり

たゆ 随稽

なかく 後仕へ泣く後終るる

かうじ 柑子あやゆへ不食也

女文の所心 女二乃所志あゝを思ふ也世終り下也

又十寺 又十寺ふよ建り

天慶二年十二月貞信公六十於大政官お六十 外指ひまゝの世はあゝりぬ也

永延二年三月十日は興院火入る六十於乙家今日終

彌福寺六十寺 心家と天子とほそますと云也

又このねりまますみて 仁和も准

仁和も金雲本の中 金剛界大日也 唐訶毘盧舎那乃はなせ

乃ゆふと云むをゆしてあると云

まのひれさの

海いふその那の花み十笑のいと別れてい又仁

和の田堂として摩訶毘盧舎那のい佛地を

とありけその佛地とい奇特かのかりまん

寺ももまういふそののいとけありとい云と

わりのうらうらの佛の巻法莊子うらの書よ

てあるしし以て定なる代を伊ひかたりてりんま

休なりうり人のいやすし法字りりこれありといも

しと似るとは似但き小不及法祝あり入りあは



飛龍抄六十寺 乙家とて天子とてはそまふと云也

又この抄にまますみて 仁和寺ニニス准

仁和寺ニニス金剛界大日也コノカマカ唐訶昆盧舎那乃はなや

乃ニニゆふと云むをばしてあると云

まのひねさの

吹海よふ野風をさむと秋夜アキヨのうつりもわりの人乃心の

ぬいさめゆゆと云ふ心也

後漢書列傳 カニカマ韓肅字伯休 榮業ニニをうらやまをニニまひは

てあるししは後定ニニる代を伊ひかたりてりんた

休なとりの人のやまを添字ニニりりるれありといふ

しと似るとは後但ニニきお不及海祝ニニあ入りあは



Handwritten notes on a small slip of paper at the top of the page.



源氏物語抄卷第十四

目録

町を木

よこぢ

すびし



拍木 女一

以訂并ある義之 源氏四十八方乃正月より杖まをれ
事あり前巻に冬まをのりきあり

れとくお方 拍木申ひきむとてとむゆもまのせ
られぬ拍とむり

つとむもむり 親おきたのむ飛也 淫慾ひまをせりや

らぬを離るしとい世よむをくめんをいりくともなり

おりのひのふり 天下れ^{キツク}揚政をもと也

ひとのゆきつ 一ひ女三まををらるるなりなるるし

一も天下の揚政なとかなるし

あへての世中 大町これ我第一のうきしふなるるの

せきとうらみけりれ

野山もつゆくあつ世後まつとらんじつうせうし

山も海もくらし

お思ひのしんはるぬ 二の首をたりかとの事一丸

されへまうー 定らうとや

ふれもちとせ うんもせよいお物乃のれをぬハ雅もち

とせれ松竹かこふ

なげの巻ども なくけしそ女にぬき思ひ返らんとなり

なげれ情と回心丸

ゆふのちひらうー 夏虫乃力さうしうしうあふし

ひとのちひらうー ちりてあふし

せあそらうしんもー わんわり

あつと 涙の巻礼と思ふを巻と思ひ返らんとなり

ゆふのちひらうー あや けものなりわ

枕もつたぬ 後川 枕のあく字跡まの着のりくつか

みしすきまじり

今き 文言

今きとや 思ひまね煙も流らんしや 引き不及れ

心のちめて ぬいさくくびとやめんとる

借後おも 拍のめれとのめれや ころもあふ又もる

あきまぬ人しんうらうら世らーとふ

この人も 小僧後也

わさもろりの 女三訓 人のをのきとてそやせま
のそきふのあすうものうのあしき

所心平上 双地

まろり 音なり 源の所評也

つらき山より 或相評云 俊若小角恒於葛城山相得

まはら鬼抄汲水棟新表不用奈即以呪傳之云々

文武天皇代人び事元 不記云々と 仍伝統

れんらんや

あのひーを 今對面しぬふと云つらきより出た

ろ聖りり

だがつべたかーを 海やそ月元 つへたきーらら

おそろーま心よや はべくーさと世後ろりつふ

至相遠元

ざらんのしき 世継物種云 可平一乙三男敦忠中納を

ひらこつーひもれ町業師道とよまをりりお十二林の

うらくひう大おと云をやて教とひとくれと云そと

雲てろのまゝ死後ぬ臆病の人みりひはく人たるは

号批把中納言 敦忠後云位天慶六年三月七日薨世八

おとなし 老婦人と也

りく傍浦共と させれ考傳なるぬ強忍せとるる

何の飛まくもあー 女れ執心と白中ー也

尚後へさけとある詞

ひーれせちの 書本二条后を杖の^しくち^く所^りに^ん
源の^い感^たえとや

ぬりまあやまらも 酒^せ房^りまで目とえ^い冷^ひひし^しりや

け^そぎ^りいさ^りの^りめ^れ流^がや^りり^り

遊^あ乃^あやま^はら^んあ^はす

海とひ初^りー 志^は依^てら^んけ^く海とふ我^を中^へく

为^ちの^りを^らら^りら^ら

ひ^をひ^とめ^め 玉^をむ^の率^りなり

あ^てあ^えめ^り 指^をを^かニ^を思^ひわ^らん^の押^也

け^のき^せ乃^がく^ーか^ニま^のが^くー^く指^はな^しの

く^くあ^ーま^とや^けは^くも^よあ^ひき^海さん^乃ひ^の

ひ^くる^ーあ^し事^一 水^徳娘^のり^す

み^ーあ^と 猫^なれ^とみ^ーあ^と又^人も^のり^ーあ^らる^こ

ひ^くる^ーあ^し事^一 一^つて^りも^のひ^さあ^らる^こ

と^ーけ^りて^人目^をお^海ー^めき^を指^さす^てい^のけ^く

と^らる^とあ^られ^文ま^とや^とう^を切^てれ^やあ^らん^と

あ^の指^はあ^の詞^をう^きて^也 能^るあ^らは^しま^遠佐^むけ^の

け^りを^ー

ま^うひ^てあ^ら ね^やあ^らん^とま^にま^うひ^て烟^をく^くん

と^也 女^ニま^はら^るま^とね^前詞^むけ^り也 道^は人^の

所^京れ^柳初^てあ^らり^い乃^きま^らく^くへ^よ

明^徳院^れあ^らる^定家^が大^裏候^と後^多海^院見^訪て^あら^る

まいのくもとを勅^{チキ}地^チあり勅^{チキ}評^ヒ以^ニ故^ニ音^チ陳^ニ依^テ道^チ勅^チ

思ひ出と伝^チ中^チ一^チうると也 ぬはむ持^チあはへ

とくおへう 拍^チよ女^チもとくれおり

多^チの跡^チ乃^チをう 茶^チ顔^チ親^チを跡^チ継^チ文字^チ 史^チ記

ひ^チあま^チた^チ方^チ 拍^チ

夕^チを^チま^チた^チて 引^チ方^チ 奉^チ勅^チく^チ夕^チの^チ町^チ節^チなり^チる

むごふひのへすへて 聖^チ期^チ 何^チ事^チを^チま^チた^チう^チき^チら

ことりへあたるもせ^チ訪^チひ^チ人^チが^チなり

何^チの^チ拍^チ詞^チ

思^チひ^チま^チし^チ源^チの^チ所^チに^チ 拍^チ密^チを^チり^チて^チな^チら^チる

希^チま^チの^チう^チり^チと せ^チり^チふ^チあ^チる^チ人^チと^チり^チて^チあ^チる

しめする

ちん信 律信 一^チ本

生^チ海^チぬ う^チか^チれ 延^チま

又^チ叩^チく^チひ^チら^チし 男子^チハ^チ拍^チき^チり^チま^チく^チも^チ不^チ言^チ女^チけ^チし

人^チを^チあ^チた^チみ^チを^チあ^チつ^チひ^チを^チあ^チり^チま^チて^チま^チい^チあ^チと^チ也

な^チそ^チう^チと 教^チ盡^チへ 密^チ通^チ用^チ果^チ也

ひ^チの^チり^チる^チま^チあ^チま^チは 在^チ世^チよ^チて^チ難^チあ^チる

流^チの^チを^チ孫^チ ひ^チの^チへ^チま^チあ^チの^チひ^チれ

中^チに^チ秋^チ好^チ ま^チま^チく^チ相^チ也

何^チの^チ也^チむ^チび^チま 拍^チ蹴^チ と^チび^チ食^チを ま^チら^チり^チる^チ飯^チの

ち^チや^チう^チた^チの^チ一^チ拍^チぎ 廳^チの^チ次^チの^チ 廳^チの^チか^チつ^チり^チの^チひ^チなり

大吏より 中書院乃殿上人を 冷白院の也

さざれ 志れもやと女三を思ふ也

ひりりけふ ねさあひりりよきれむあり

さのこころを いよく源のあやうふれりるこころ

とやあのとときさるこころやと女三ののりて耳たぬいて也

さやうみみて 尼り成候もんの子細もなひらんと

おのひぬく源れむ心

心とうれれもんの 女三文の源氏より心とりのせはれん

とたり

ためー 堂上れがけひー色は中腰とたり

年はみたり 女三乃れ心の中へ煩悩院を意くわが

しりてはたまふ

よふやくせし 教りる也

あのみら乃やと 人の親の心をなすおあし給もよと

ねりあさうまといぬらうれ

なりまの ち理ちりひてとくせきたつとたり

みのとち 出家もくも也

うらやーく 源氏の見まら給かたり

まつひぬふ 源詞

ふひのうられ借 朱の所利也

あなうー ねのけうなぐれりめさん女三へみしたる

こんとそと也 朱乃あなけうなりとるあまうとたり

そらおろくやう 尼打とて救てはなげと又いひとや

日比も即くらん 源訃

ざけ 邪氣也

うれお悔けぬとそ 拙氣に負ても不慮事とさる

佛心たうら 兼乃所心也

何れも 句 人わら世とて振とをりて所頼よとて所

て尼ふる一 婦人との佛心

あつあつとさまりしとらうら 女との源とらひき

とそおやて尼ふる一 婦人との佛心

あひ一とあ一めとたり

そうぐんよ 二巻とて来りり女二入集とて一

うらそ 養生とてとたり

つれなくてうらめし 女三のつれなきをうらめしく源氏

とひらうそ振舞ひあつるを 時

みゆき 昔お祭のこもさぶとのおひ出られぬよ今

日れ佛幸の所礼象とも只今をわらうみくしはるは

はまのりおとかりぬらう所礼儀をもみとほとぬとや

世中一 兼所訃

又さる人 女三とあひけけけと人あつるとたり

さあまはきて 源へあつてやられしとや

あつ子即く 源訃 源氏もむ記とたり

あや 媛也

とりの色しつと 紫上を中懐くく六の息靈又女三へ

今ハの魚りるん 紫花物短小一系院女の 顯老女 凡非

氣まての堂の女乃久一を煩て沸く一たろ一て娘乳

てま折てとらひく事あり 下略亮

くやう 邪氣家乃此出家とくやうく心る也

女まれ 女二文也

今一たひ 拍女二へ系てみし乃つせとれとまら

びま乃 海系を佐つたれなり

二品のま 女三文の事也

たへぬ参り 不堪也

母一人あも 拍の母へ 海系此事一とびら

忠大并 紅梅乃れとくと云人也

忠大并 紅梅の石大長けまよ忠大并より 系族る也

大乃乃 祝言中も夕旁系りたふ也

みんれ 端をよくと進う一とまると也

まふまよりいひ 權大綱言れ也

なと折く 夕討

つとらち抄一う 拍討

急りけり 礼儀也 五装束一とびらり

あつげひ 髻 髻

とくれま 末れありこの末やまの申一とびらり

とりの色しつと 慧上を不懐くく六の息又女之へ

今ハの魚りうん 榮花物軽イイガ小一糸院女の 顯光女ハ此

氣よそ此堂の女乃久一を煩ワザシて沸くたうて取ミ

てまけて日らひう事あり 下略花

くやう 邪氣ゴ故乃此家とくやうとる也

女之れ 女二之也

今一たひ 拍女二へ系てみまらうせとれとる也

びま乃 落系を佐うたうなり

二品のま 女之文のり也

たへぬ参り 不堪スナ也

母うへも 拍の母へ 落系此事とる也

忠大并 紅梅乃れとくと云人也

よほこひり 大綱乃系なる也

是たあらひ 不堪感也

大乃乃 祝言イハコトゆも夕参系りたふ也

みんれけう 端をまて進うとる也

きふをよろこひ 權大綱言れ也

なこやく 夕詞

いこくらあう 拍詞

急りけうり 礼儀也 五装束ヒツクなり

あづばひ 髻 髻

とくれさう 束れありこの束やをのち乃とる也

きたりたりけりらん 指と夕との中れこころ

ひるしのとりのけり 指の詞

恙みつらうまつら いまの世の程と也 ひとみ

しらくししうぬ きせぬ眼ももほくことなり

大町のいそぎを指とて心中のいそぎのあはれ

女三礼事けりるを

これの連阿まこ 指證兄弟なこめのおこし

痛恨

院乃所歎 朱雀也

あうあん 襦袢也

ろあう ろんりのあま

あうド のんたうさゆらーあは様ゆくなり

あうにさう 夕詞

けふいらくの 指證

今日あまとも けふあゆみちとわうひておし

まねふらふとたねとさうり

今日不恙宛明日不恙宛 何れ道指柄子親之勢也

とくろ 夕の所歎とねとんこと

あうらうらう 命あひあらんとて我けり

いんろやさんと色一とけり

てうま ちよとてへぬ人

女西と 冷泉院乃女西 指代妹

大おの湯のこ ち井のち

なれ大とれくお方 玉のつらなり

やむ茶 我とうをみぬ人こふれ病るれあふりかう

やむ茶あ

あものきしいれ 世皆不^{スレ}案^テ固^ク如^ク水^ノ沫^ノ泡^ノ能^ハ

宰人の何給かとのじ丸

はなは

下乃心とう 女三^ツお^ソ庭^ノをさま^ツけ^テの^ツう^ノ志^トあると

うらむくみ^ノの 拍せう久しくあふま^ニ気^ニ性^ニま^ニか^ニま

おとくをうとに振るうましうこや

おとしお方 或説云 隠仕れれとくを信^ニた^レる^ノ所^ナ

小^ヒ准^シく書^キこ^ト也 花中略 教敏のせぬれうせぬ人

ともちて馬とまういれを信^ニた^レる^ノ ちんちんぬ人のち

ちんちんぬ人 我をひいてを信^ニた^レる^ノとある

あたま 女三^ツ拍^ノとうこ^トてく^ニお^ソい^ハし^ノの^トも^ト也

わのち 意の事^ノの^トみ^ト拍^ノひ^トと^セる^ノ事^ナ

拍^ノの^トこ^ト 醫^ニん^レれ^ルお^ソと^クする^ノ神^ノなり^ト也

進^レれ^ルあ^ニあ^ニ 女三^ツ尼^ノう^ノ厥^ノ後^ノを^シり^ト也

信^ニつ^テお^ソり^ラい 又十日経

お^ソら^ニと^シたり^ラる 尼^ノう^ノ厥^ノ後^ノと^シ也

か^ニあ^ニの^トり^ラぬ^レく^ニう^ノ 男子^ノる^レる^ニ尼^ノせ^テく^ニ不^レ考^ト也

ゆ^ニし^ノら^ニを^シ 女三^ツと^シ拍^ノの^ト密^ニ通^スと^シり^ラ

ひ^ろう^ノう^ノ 源^ノの^ト信^ニ

湯くー乃す志 澄尼とて唱食カクキた扱也又来どんかじい

さきすま 次と透くとと家もあついか

色く又ひり

りすやうま 紅梅よりきやく涼知よりき落丸近げ出ま

こころりなり

子いもの れきあひ乃むらさき

めまゝあゝくきむれ よひまふよまり

すこめいそ 花いふとすこめいとすこ 今もたゆまずれはるむる

とりう魚す 物あつれ也世中一とまーしけうの扱

カとねまさん

今ハとせ扱ー 尼は殿さるとと源といひはるま

三乃心と世成すてあふとらうーのらんと也拍氣の

志らる事と合たうとらうーのらんを源氏乃といふ

しうらんとなり

うしめ海 女三の討 うしかなのとも 源討

あがーあを 拍気也

女西乃まらう 的名中文の四肢 ば西殿推せけたうー

王あめて 且縁り記らるとなり

あゝのきつと 意也

くくの方あうー 只今うらうのまゝ拍の面影となり

ほふこぬ 眼の肉れ也

又十八 とよむ

はま

語く乃す志 澄尼とて唱食カクヤクた指也又末くんじふい
とてすま 治と透くとと家もあつた

おしく又ひし

りたやうな 和揚よりきやく源記より考案近世出真

しつりりかり

子どもの ねをあげりたつた

めまゝあゝ くらまむね よひまかよまの

ゆりのたう 漢代おもさく今もたゆまふれはるむる

とりう魚す 物ゆもつれ也世中一とまーしはうの我

カとねもまん

今ハとぞおひ 尼は殿らとて源といひはるる女

三乃心と母成すておふともうーのらんと也指氣の

志る事と含たうとつりーのらんを源氏乃といふ

しうらんとなり

つれなぬ 女三の討 りひかのとも也 源詞

あがーおを 指れ志也

女所乃まらり 的る中文の四肢 ば四肢推をけたう

王者めて 且縁り記つらとかり

あの言つと 意也

くつりかろく 只今くろのみま指の面影となり

ほふこぬ 眼の肉れ許也

又十八 としむ

上

志のり小ねりひて 又十八翁方まじ後 静思しんじ堪喜かんき堪嘆かんたん

持テ盃ハシ祝イハヒ願ガハシ之地チ地チ 慎シ忽ク頑マン愚グ似シ汝ニ翁ウ

樂レ云ク似シ平ヘイ卑ヘイ下カ也ナリ樂レ夫ト又モ十八ハチ男ヲ子シ也ナリ也ナリ出デ遅チ必ズ信シうキ進シ小

びりひくの池 源氏今四十八才ニもテ面白シ也ナリ也ナリ討ツこの

拍ハ一ヒトの討ツもや 茶チさハわハ進シ小コ不フ似シ也ナリ也ナリ討ツを汝ニ又

拍ハ似シ終シふフとト如シ別ヘ小コ心シを書カせセるル妙ニく

あの事ノ乃ハ心シ志シ進シ海ヘ 女メ三サとト拍ハとの中ノ五イ何ナらんと也

あくらん 敵トク 打ウ理リてテとト云ク心シをハおハ南ナ乃ハ心シ也ナリ也ナリむク松

ぬたひいらんらん 源ノ乃ハ海ヘとトるルをハ打ウ理リてテをハひテ女メのハ海

ためとがわり

拍ハひひととて 甚シれレ海

おの也ナリ乃ハ 彼カ仕シ小コ方ハ也

ととるルままのの見ミ 引ヒきキ不フ用ヨウ

たの世セありキ身ミ 棒ハシ弓キウ破ハへの小コ松マツたの代タありキ系ケイ代タうウけて

終ハシとトまマれレあん 心シをハ明ミ也

ととめメとト 女メ三サのハれレきキうウけケるルをハおハりキひヒ終ハシめメとト

察シヤク通ツウれレ事シとトるル也

ととめメ一ヒト拍ハおのてテらら 拍ハよりリのハたタとト一ヒト討ツとト也

又マたタ 二ニ条ジョウ志シ堂ドウ上ジョウ乃ハ海ヘ出デ家カとトもモゆユらシ海ヘをハぬヌ不フ審シン也

拍ハひひととり 拍ハのハをハうウらラとト拍ハひひととるル事シなりキとト

拍ハひひやヤとト拍ハひひり

ひひととり 拍ハひひととるル定テイむムとト拍ハひひととるル思シ入ニ入ニ也ナリ

と見新て物思ひしうしあたま地ほのまー事可いや時

ひりの契と 昔の音せとびり

女意うーたふ 志折るへ也

ほろゆく 洗服 偽ウラヤ遣ホトコふ物ーとらひ又た女の装束キウゾウクお

と涙を施丸

目れおなきう後う 波止た自詞

中ーくみらあまこげ 又れ子乃るゆみむとウツメさのる

とて子乃真途マチ乃さうとばらるるーとさるる

お母けうけくて け折るも後あひねるくおぬる

このとけひー けく前あう言詞コトバたと地後シヨウダクるま所也

言とたてぬも 法人ナニタ涙よくれてむをれくらなり

あまえちうふ 指もさよふ位なるるー又さばりても

ねのりこし

たおとれくおろー 注れ心也 けくゆのあめねり

双比とむぬし

并の秀宰相 指兄弟

いみーさ 夕詞

されく人くゆも 指の兄弟よりあえてとと也

ねりさ 二月はねるり多し一年中ね事あり

まばりくさく ねるりの何ふ泰てりたまへもいりく又

まばりくさく ねるり多し一年中ね事あり

れやあの道乃 ねやめ二れま乃心申けいり

め、おぬけのらひ乃 婦夫の中りやなり

言はくことこそし くらむを家の詞

又にくひうれ 尋るませれ理とや

お母しりるさる 落葉のまひまのなせおありあわ
の連ねたぬとけり

あこくくれ 拍と又落葉乃あやしくみせぬよとさるに

をれつうらちのき 拍と夕と清きまよて自然うさく

たさちんとなり

ちめくうしより 拍方へせくまのまよとさるに

あつうれむとまて 泣きおろむのなまよとさるに

思ひをこしや

みろのうれ つくあうひやんぬい

みこたちさ 白

おやろけの事なして ちこれ事なる同く

く葉あうらるるよとさおろくちの事

はなをさるなりとなり

らふらふの 落葉乃けく感ずおさる

のう又らあくとまのまらちうふのま

ゆやふらひ度く 今初也人傳の落葉あつし

あつそのの 詞つまのまらちの白と可切

拍存さるまめ二と中りまろのけら落葉の

つひとまけひーるうはし

音

あまうれ 指遣まよ 夕霧見守ぬるーなり

うれ死せえ うれしとてうれもひをせしむるうれ

あまものやなみしるるなり

うれしとてうれ 是れうれとて門控れ事とておの徳ぬる

おしとてうれ 又うれとてうれ

あまうれの徳と 色不及の心を 色んくしを明らる

事ゆきとて候なり 色んくしを明らるる

ひらくーとてうれ 色んくしを明らるる

うれとてうれ 色んくしを明らるる

うれとてうれ 色んくしを明らるる

て夕霧をよとて出ぬる

うの意を 指の事 夕霧よりきふたれ年うとてうれ

あまうれなり 浮葉の影乃揺ーひあうと今年

あまうれとてうれ

うれとてうれ 夕霧のひるー女二と念ーとてうれ

うれとてうれ 色んくしを明らるる

乃ぬるに 呼

あひみん 春毎に花の盛りをありあめとあひみん

あまうれとてうれ

あまうれとてうれ 夕霧の徳とてうれ

あまうれとてうれ 夕霧の徳とてうれ

あまうれとてうれ 夕霧の徳とてうれ

せたるは愛おもふ事一々万事淡ぼりとりとかり

つとぬりあうり 更衣のひりちあとのしりふきを不考

——の無子ゆとたれむ也

おのれおこ 老乃敷也 てのたまひぬ

おのれおこしりも 親乃考まんとりりるま——んまぬ

もゆくりん里 三系へ不考のゆはあつなり子れ

ためそ考を尽ししゆへり

見たる 役仕とタの也

ゆかりしり 拍とタとるま

しん とう紙カミの事なり也

いまはぬく とう紙カミの身れ詞也

老乃ゆき老乃 妻れる 役仕の詞

みる人きあう 女を結人出ぬまはしりゆう世のさし

うかりんる

もろくしりしと 拍の進退也

あひこのじん 家礼ケレイなり

ゆのきたりのひき あつしりてまててを位あゆ

あゆまゆすしりなりけうらりのあつてを志ココロ人れ

ひのめあつる 夕くれのま乃きまをみるりおひの

めしと心ひりしり者 不用 大をるま一人れれ

うそ物思ふしりおひのめらゆらん 可松死

きゆう 夕考あひのめらふ也

このよらん波よ 沙皇前乃小書カキを人治るる

本の下れ方 汝仕露家 墨乃多とそへり 嫡子の親

も子乃服とめをれ 今も如く親の喪モあり 恥づく治

ますとも

も又人も身 拍の向の海よを思ふる事ありとけり

ふれはてふとも

并れ表 如揚のれとも

うらめしや 身心的やまとも又危を拍維とあり前よて

ありさ海のむちもれり 子もけりてのむらむ

愚私志折カク不及沙汰カク丸

取をひくふ 志并とたと對タイしてなり

はあいのうもき拍のむれ 砂城うもく拍のむれ

とれしてむらうれうけりなるらちやくまを治るや

陰よりまを治るものなるし

一ひく拍 志を控し一ひく拍虫れ細の志を解へと

を願ふりうれ あくの詞をとりに

夕立乃一村唐ならりて虫の絲うらん杖風うゆ

いよとカク 服若又カク 華家うめいありの

諺言の町若をいんと禁中お用也一ちつとらるや

預めおころのれく 服衣受るれとおうりれせとなり

くささこのこ 夕芳以前を由よ入ぬぬきうまを自然れ

私納涼の町さるや

とびく、さううところの同也

ゆとゆあもれ也 夕乃心申

ゆらりころり 新物らりりりちりころり

枝さころり 連^ヒ理れむ夕芳かまうしむさうけけ發れ

茶の一にあらふとあふをせまれむ也

ことなるは夕 夕ぬひかりもやうし一れ者枝よふきん

とあらむ心なる也

拍子乃およくもいりて但をまよしもの

大和拍子 何よ奏略之 批^ヒ地る左大和仲平しり

ところの家又拍を拍おけうとくろり書^{カキツテ}付けり

我者どのりりしきのなりけ葉のなりしむかよとせると

おとこする 也 拍^{カキ}本お守^キ守の跡れまうりりむと

らくろわししとくろりされば 拍^{カキ}子限て茶もあらん

と甚後云々 名も徳本にあらしし樹^{カキ}神もれ

時一とあまをともりの跡お月ゆりしは感ぬ葉乃か

しともよ とも又後れ 為^{カキ}とや守乃跡をれし

らん月おあふれむ向まのまは け^{カキ}方を感葉汁と也

夕芳の夕を茶お守と拍^{カキ}茶門増りしもの也

拍本よ夕 如^{カキ}二文の夕 虫お志を 如^{カキ}二れ文のいし

けり心さめぬらん也

あゆむ け^{カキ}る心音信もあゆむあゆむ感んるところ也

おゆしなげく 夕芳詞

いふこと 女二れ事と夕暮乃びうかりひうひこと
まゝのひ——るるま

んわらえれ 拍へまひまぬふらへあゆみ又あひ拍め
別れ事——りうるそと夕乃び中

んはなぬき 拍思ひなりう拍へ乃事——
さ思ひまを——とひら拍解とひきんぬ

のしちうりや 拍の女二入心とまの——
まくれ——のひらり

みらあふらるこ こあひちちふうりあま又心城よふら
しうと拍上と思ひぬくる

さぬま——ささし うれ拍もるたよひとまことさかんあ
まのうらもく——ひりうらん用と也

今をれ若小 け短ハ苗をひひぬ人王拍とろと——
——めまのまらと

そらりの 夕暮まき也
のれとく 拍也 花多相遠 おとくを敷れ字とん

夕暮の
いふちやふじん 女お軍可送人るれとまのせう——
可送人ふく——するといふま不信と也

中拍秀句と云拍小あり 天ら善人ト 不信た為真慕
初秋 紀樹爵

——庭の葉れき——とみてとん
しはむらむら 乃男保忠事一丸 杖とあふと

之りて卯月をんじ也 大御唐名を御軍と号と御林
大御軍幕下之く大将 尤も右兼門將を唐名り
金吾御軍とり人れあはにあひた

ろれものちりま 秘勅 瞬

大納言之位は陰奥に御按察使通り 大納言大御名
系初は保忠承平 六年七月十日薨 四十七号八
條大御時平乙一男 中朝鳳雛代元始保忠は御経より
町代ちりろれとてそとそとてぬてまぢりろれろれ
き事昔とて世中子とてま死ては人を御一むとて
むへくろ 実りろれろてとて承入りむは分
抄ひし人と也

うへろ人 今上也 御琴乃師きて

御心り山 源

ろれまはと ちひいさりと 下れあはとあるも

吳中 今のかなの下乃書と筆方同意のりは治ふと云
とめたせらる

横笛 笛之惣名 管笛也 乃云横笛といへり

管之管堅 笛之横也 笛條也 字注嬰款とのうくと

云心丸 以言為卷名討ふを笛といはりあり

源氏四十九方 拍本をた来ふ秋乃るりまてありひ卷

は次れ年春乃事あひりり

左推大納言 地衣といふのあつて班固傳より出づる討

ゆつと成るゆと云心也

いりふう也 女三へ密通乃事

ゆをくあも 拍れ一周忌二月 源氏此志あへり

ふあつともあつて 蕙の沖 之れ字めつてあへり

こころ百つあやう 李尸王記云 天智十年三月十九日

清八藤結願大皇太后 拍敷設け奉八藤

春入て時夕藤也余終 風通細布百端南内は金百支納福

福壺一具水藤 別みとあつてまの志とあつての討也

れとくさ心もいして 後仕

多れ跡より毛 拍の事

おろし道とらう 女三尼小殿ゆふあ今世を源とも別床

やとあゆみ押也 一巻終せと云こ

とくさ 女三へ来りりまこ

たのうあ 尋原上心は着申出林逢 文集 巻あつて心也

送筆束抽の風管 盛振後點外抄文 朗脉

送筆束抽の風管 盛振後點外抄文 朗脉 冷泉院へたのうあをうせ

花山院の製 世中おもしろい
もるれ行れ子を裁つじ年をたてまうのなり
年へわら竹のよりひさう魚してよい世をけりてお
さんとそわのり

春の野よめあゆとくんとくろくふれとま
時 紫の法師 志乃野ふ前をとむとりのけりりゆと
まぬけしうみそとるや志 せー 春めくよれれく
みまといのまはるせつよおなまこ人のためよ

春乃山あすも 志れ来より羞あゆくあは
世後りのま交 山終りとうとくれけりとも後まき
まはるとおれ人止上并を初めとん事の中懐とるま

入るん道も六るよ子の道者めうや月雨を極果也
あきとくろともいせぬ人里

いとわしきつさふるん 地蔵中お経 町 おあり
は花よ無限解款へのるといさめはふ詞也

らいつとも波 豊子 又櫛子

たつばなれまこしよとよまぬ里揃のあし髪阿をれあ
くろ極なり拍うやとまゆらとたわくまこま

肉を来漆かを志漆螺螺撽とや菓子打とといれくるる
河下略 畢竟くひ拍有といあく器かたうし

きありのとま 涉又言 春の山ハ 端書也

ねうし前ふとま 好又詞はまきまの聖代ゆひふ面白し

わ蓮花入 源の女三入とらうれ方故とひれ中よとる也
うまう魚 女三乃あうまうとらひいし也

うま世よるまき 世中ふ也 拾遺十九 夢世あまう

ぬいぬいどとてうれ年一ゆりれいふゆいちゆいんれ

うしろめとあ 兼直とかりぬい入うまろめたるを

ゆ又よあぬおとあうま六条院と離れんことばう

らと海入と うしろふ今まてい不背也

つとそぬるく 女三と尼よ成ひしこととに悟源氏

の思召けうし切しとゆふを今罷とる也

うしろことん 唐れ小又唐の織たれ袖死及を紅梅可成

うまろれかきり うしろりなる神のうまろへひま

あーたらあうらびり

柳とあつり 白物 揚柳と白まふれと人鴨頭葉の花と

あまのよそへたま 共小現量元

ふとあうま ちうそれあうととと詞也

うれハッや 拍と思出ゆへ也

あはらううりー 源詞

女三もがけゆりう 明石赤股交違なとあれ小のゆふ也

荒れ山の里を 拍巻に夕暮乃け方をみせし回まらう

ひさうしとまりあうを命よの三つこさと心取てくらす

さこゆんぬれさうまゆ子遊れ整をまへたれ也

春毎よぬれ感はありあめとあひみんことと命也りり

束をりく よそつよえひれ 五月西の東よと鳴けり時
も神乃むらまのまゝう怒一ふ

つと孫らけり 源経基乃神を好まゆなる御業と也

打あふともあもまれば神とも也筆をくひけふよまてへ

て書皆指れ心お似くううとつひたまふ心なり

うんやーも身 受やーを拍の事也 今又お河生也

ん竹の子れうさゆー志げき世とをーす也

わくはちち 筆をひえとらひり并てを引ゆる心お字を

ひしそりーう うくのりーふと云心也

うんやー 拍の事

力つーの所をくせもたりのぬ ねあぬ事多とを

源も不慮是とら

色かつー 拍木 女三又ホの飛のいまとまよりせ三

文の所为上と思ひきり中巻とも思ひひひーし拍を拍

お不慮よの拍家となり

もとりやして 琴_下有とを記て巻よりとのぬてん

目の伊との 夕れ三条文

ましれ 多葉 万葉

ひ乃孫 君を括し一村薄虫乃孫のまのちかへ

るをうーひらうれ

まらふーへ 律を女又秋あしり

こま 拍

あつとめつらうなり 拍乃ひのけ 琴れ音の事 なるを
あのはしと申す 廿二れ文乃ほしとてまき拍のゆくこと
しんじり 呼

琴のこしり 昔伯牙鍾子期二人好半也鍾死後絃を

断て かなき人を信をせし聖のをきたらしし月日

めくらしきたり 近息前れ詞 廿二文乃ほ聖をけり

わらわあらし 榮菫のほ前ま 心事つとてし世

てまみまを童ありむのよれたまきより

廿二文乃 廿二琴打とわがめつらうぬらうすぬら

とるひ

あゝぬきぬみり 廿二琴乃とてびんわきの此物なる

めまーと 心のり

をのうさけ 見は海川 浅草生れと藤の葉ふとて

乃よのまつまと思ひみこけ

拍れ事と思はれはに成ま 廿二のひまぬとて

りや理れ 夕の詞

あきらたふ 忘しとの限ふあ世けりきこつとて

と志おてなけりあき 夕霧乃ひう二あり

拍れ事と思ふと下より廿二のさうとけりる

いとそとやう 夕乃を成とやとぬら

つれに 夕へは息所乃琴と前を也

群ふけとて 伊息前乃詞 以樂傳の事のり夕ハ

拍と^ナ音の事と云々 琴の音と^キ分人乃おあへへ

今うらもてしとくもすくへん

みこをよ ^如聴^如仙^如耳^如留^如的 ^如器^如引

志のつこをれ中れと 和琴才二弦也

拍より女二へはこをへんといふと云わ拍の中

といふん用也

まのうらのます 女二文今ひとり拍の程と云へるれを

るる不^ツ乱^ツ引^ツ心^ツ也 秋の波おつと云はかまぬ

る金を春ぬるるとも云らぬと云

あうのしと云 湯息ふ乃引ぬへん 夕の和琴をまへ

流ふと云引きて筆をぬ引ぬへん

あうぬと云 忽府基 又おま憐 おま志 あくよてま

おま志といひぬて可也

思よりひく不花夕音の思ま志といふて云ふ可
思よりひく不花夕音の思ま志といふて云ふ可
思よりひく不花夕音の思ま志といふて云ふ可

まへを控まらぬと云

いふいてしと 琴と云たせと云

おまれ拍の事 小^如能^如引^如て引^如ぬ^如事^如をい^如ま^如ぬ^如さ^如り^如の

事 拍と云るがうと引ぬぬと云と云ての事

まつあつと云と云り 忽府志乃まつあつと云と云と云

あう引ぬへん

拍と^ナ音の事と云々 琴の音と^キ分人乃お^カあへり

今うらもてしとくもすくへん

みこをよみ ^カ聴^ラ仙^ノ樂^ヲ再^ラ習^ハ的 ^ヒ器^ハ引

志のつこをれ中れと 和琴才二弦也

拍より女二へはくを^カあへんといふと云拍との中

といふ用也

まのうらりもす 女二文今ひとり^カ拍^ノの^カ中^ニや^リを^レれ

るる^カ拍^ノ不^ラ乱^レ引^ラ心^ハん 秋の夜ふつと^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

る金を春あくるともう^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍よりと云 拍息ふ乃引^カ拍^ノの^カ事^ハぬ 夕の和琴を^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍ふと云引きて筆と云引^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍よりと云 拍息ふ 又拍息 拍息 拍息 拍息

拍息と云ひて可^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍のひと云ひ拍不 甲下詞

拍と云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

まて 拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

と云ひてと云 拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

拍^カ拍^ノの^カ事^ハぬと云思^カ拍^ノの^カ事^ハぬ

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured.

少のきぬれき ともくかや 大町の町前赤乃
き威しなうししよりきぬれきぬれきぬれきぬれ
されとあるにひま谷の舞の 廿二文の所也き
さぬ後まきさうしきあぬと也

おき人の きもあま忘れ事うや
すましくいれ 夕詞 昔のともめを拍本れる也
ひま谷のあさ ことわいへ廿二の与前へ歩むやうら
んとたり

こふひはまきまき 好みまき也 ころひしきまきり
豊満すましくいれさきと引合ての批判双地とみて
可読おれぬきんともま双地也

あしきまき何と ころいれはこなきかたきふよりあて
何とすま何とま乃をうしん 何とまれをよせんふ
まきものうれまきまきまきまきまきまきまきまき
あしきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
何とくり拍うし 笛のふま拍拍あつし

ゆきまきまきまき 包山陽回名思愁葉や 藤人吹笛池田思賦
向考 愁葉まき也 げのむらり隣は笛吹とて愁葉
吹心まきまき 筒駝 寥亮 りすかむりあいにあつり
りしきまきまきまき 蓬まきまきまきまきまきまきまき
何とまきまきまきまき 何とまきまきまきまきまきまき
まきまき

みゆらう〜〜ぬ 我ホお色ふならと 夕詞

と声とあふふりりて後方とのゆへに 為よ〜〜う
とつふら〜らなり

あまうひに 考は拍方よま〜うゆてりらぬるらひ笛れ
音乃限いんぬ〜〜と〜〜う〜〜ぬ〜〜し〜〜る〜

ひ〜〜とまのぬ 拍本を思ふ〜りて和琴を引し事〜

ゆつられゆ〜しひ笛をば〜〜ん事〜をい〜〜と〜

あまの〜言 吹息の音 虫れ群〜笛の音をば〜り八世

御抄り〜もひの連ゆり

又選笛賦云 終聚ホウキ衆音ワキ櫻積サクラち〜

衆音をば〜く

れ〜もせりい〜や〜ん 乳業れ

よ二笛のうたむ〜く〜う〜一〜笛のゆ〜
我多〜ゆと〜〜う〜

成しハ拍事ハ 花袋不用

の音群をば〜り〜〜とみや

と〜〜もあまの音れ〜り

と〜り音乃ゆ〜ぬり〜限ひれ

横笛一音天地杖 何

国史云仁明天皇承和元年一月辛未日高松仁高敏光

夕初授イサ六位上ウツ大内ウツ 侍上外従子位下ウツ 清上ウツ 融吹ウツ 横

笛ウツ 吹息賞ウツ 横笛二字乃出前也

いと〜りきと 妹とあまといれ〜の山乃山あ〜り〜

な〜りのわれうやうがま〜う〜や〜〜り〜れ〜う〜や

信馬アラキ 塚子我 山岡アラキ 香海アラキ とい〜を壽アラキのル

みゆらうしうしぬ 我ホお色ふならと 夕詞

と声とあふふりつては力とのゆへに 力よとてうめ
とつふあつちなり

あまうひに 考は拍方よとてうめてりちなるうし笛れ
音乃限いんぬいことぬとていけうしはゆしとる

ひうとまのめ 拍本を思ふりつて和琴を引し事そ

申ふられゆしし笛をばうん事そいけとる

あまのいさ言 吹息の音 虫れ舞う笛の音をばきり八世

御抄りしものひの連ゆり

又選笛賦云 整聚衆音 櫻積ち

衆音をばく

れくもせりいさやらん 乳葉れ

よこ笛れ言 夕考びりく成しハ拍事ハ 花祭不用

考は泣きとてく人ん 拍の音舞やびる一此とみや

とてつものあつちと といけうしあまの音れあきり

とつたり考乃はさぬりき限ひれ

横笛一音天地杖 何

国史云仁明天皇承和元年一月辛未日葛城仁高殿は

夕初授^{つひ}六位上^{つひ}大^{つひ}和^{つひ}尚^{つひ} 侍上外^{つひ}後^{つひ}又^{つひ}位^{つひ}下^{つひ}侍^{つひ}上^{つひ}吹^{つひ}横^{つひ}

笛^{つひ} 吹^{つひ}息^{つひ}賞^{つひ} 横^{つひ}笛^{つひ}二^{つひ}字^{つひ}乃^{つひ}出^{つひ}前^{つひ}也

つとつりきと 妹とあまといれさの山乃山あらしき

なとりわれうやうがまさうもやとくんれうや

得馬^{アサキ}聖^{アサキ}呂^{アサキ} 妹^{アサキ}子^{アサキ}我^{アサキ} 山^{アサキ}蘭^{アサキ}交^{アサキ}や 香^{アサキ}海^{アサキ}さ^{アサキ}れ^{アサキ}と^{アサキ}を^{アサキ}舞^{アサキ}の^{アサキ}ル

和の心

いれとけさうしひつふハ妹乃お入致るるといふは
しつと我と 自然のまらち

みぬらとも 甲とらりつは勝く人さかひんはわらわ
らふまらち

あつた月の月 せつとらるまれ一や思共とらつて
ねむめすしん人入そらち

こゑ 指女二へりのるれと大町おまらしそらち
みとりきんさう さねめしぬとらつて

大町これ世の世者ともうまらち せつとらみ
つすらふらもあらち

月のはち せつとらちのつち
打りきまらち ひとの不盡しとらち

おどろきしひ 夕星びつて別の心もなまら
て懸あ入り

笛竹ふき 指差中乃き 因とを思て吹あ因とら
しとらつてあはれとち 吾僕を皆あのとら

付て吹あらち 其あしなまら我はしんと
とらち 末の世のまら世乃あつて一
はつてなり

おりのあつて 指差まられ討

つと 嘔吐 小兒の乳あまはしと成り
みまらち せつとらち

廿九

うさ

女所の清のり 明の女所

三ま 白ま

あけこよそ 白まと雲上か一文と後所子分る

女所より今夕雲上ののこへつてまゆへ

大将こそまゆへまゆへて 大ぬをうひゆふゆひてつ

とあけこへと白れ所討 あまこまゆへれまゆへて

おへし

うこまりて 扱けく力をうけまてなりれまゆへ

此所清のり白まの討 ぬの女所へ源氏をうけまゆへ

たへとまゆへ

みまれまゆへまゆへ 雲上乃ゆふまゆへてのゆふんと也

まゆへまゆへ 扱

まゆへかハ 大ぬの扱を人乃みぬ扱へゆふんと也

の所討

こけこゆの二まの扱を ぬを女所のゆ

たまゆへ事也 うゆへみてま 源氏の雲へ

ひかりる

院も 源氏

大ぬゆ乃ゆちのまゆへり をぬれ大ぬ 扱身道ゆ乃

扱官也

扱より 兄のゆへまゆへまゆへまゆへまゆへまゆへまゆへ

とくし源一はひさるる

うりちえて 源一

ふつれみさや 夕暮の事 源一 ねてはるり

わくこほもん 巻上はひてへりり

まの目の志 女之なる志を 甚

ひろくせ ねとあひどうりく 源一はひせ

大ぬれこの志と 二文の志をいふ 源一はひせ

ちねのい志とね 二文の若志といふ 源一はひせ

二文のい志とちねの志をいふ 源一はひせ

おまほふやう ちねの志をいふ 源一はひせ

おまほふやう ちねの志をいふ 源一はひせ

むねて可読

おまめとまゝ 夕拍の事 源一はひせ

夕のうらみ 海老りの山 源一はひせ

夕のうらみ 海老りの山 源一はひせ

夕のうらみ 海老りの山 源一はひせ

源一

夕のうらみ 海老りの山 源一はひせ

源一

源一

源一

源一

くも襟下 ねむるる

うりちをて 源氏

まつれみさや 夕暮の事 源氏 ねむるる

わくをねん 巻上れつて入り

まの目の志 ねんまの志を 志

ひろくせ ねんあひどうく ねん源氏ねん

大ぬれこの志と 二葉の志を ねん源氏ねん

おごのかきりなきて 二葉の志を ねん源氏ねん

もとまきすてちりつとき 頸紙のへん ねん源氏ねん

おまねふやう ねん源氏ねん

ねん源氏ねん

むねて可憐

おまめとまき 夕拍の事 ねん源氏ねん

なううやがき 海老りのり ねん源氏ねん

りくくねん 拍の目 ねん源氏ねん

ちくねん 拍の文乃海老のり ねん源氏ねん

ねん源氏

りていくく 夕のむね ねん源氏ねん

てまめ

たのへ ねん源氏

ねん源氏 二葉の志を

ねん源氏 源氏

ひのこしりもたろ びんごうのうらさ
しるあへり拍事かこるあし

あつちあまを まつあつちあま二乃引あひしし
あつちあまを源後よりあへりたりいりこあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま
あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

すまを 好ま乃お奇也

何のみこ連の 夕詞

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あつちあまをあひりあまあつちあまあつちあま

あまのあまのく 夕暮はなるくし下りてあぢとけぬふ

うしあまた詞 まきまけふに面白てよとをむなり

まもる夕詞

あのみあまのく 夕暮れ拍をきりし事也

うの笛 源経

陽成院の笛 南文或々心 貞保親王の笛乃建若清和

陽成院の笛 南文或々心 貞保親王の笛の
建若清和の笛子母津友后陽成院の笛子
それと建若上の父或々心よりあすつてこゝに
うらつたゆゑありとの語あり

末代世の 暮中れまふ 笛竹に吹く風のことなり

末乃世なりし昔ははく人さしとまししなり也 花

さあうに思ふあつたらん 拍れきへとおのふかりあんい

いひいへともまのくしあそと源心あや

この巻を 夕暮の事也

その三つ一れを 毛より 夕暮乃心

いまもこのつりて 笛乃次子おのひやうふらむら

ア〜〜とあぐら

あれいとも 源乃心

あの人 源経 三つ一の目

この巻を 笛れ傳のりしきとくともあそむなり

うらつこらひとも 中務あまのまそらうのりあそむ

と也あいともあそむキツキツ

源ふ人 唐人也 夜暮不須説

何れもさしなく 夕暮はかなしくなりてあぢきなく

うらやまの詞 さまを新ふに面白てよとさなり

まもる夕詞

その差のこゝと 夕暮れ拍をきりし事也

その笛 源経

陽成院の笛 南文成の 貞保親王の笛乃建若清和

海子 母二条后陽成院は才きり比して捲園成戸

よそ萩乃裏ありしと可む也

末代世の 暮中れきふ 笛竹に吹よ海風のこしなりし

末乃世なりし昔のほろりさしとさししなり也 花

さかうに思ふありとらん 拍れきへとおのふなりあにい

ののこしとらまのくしあそと源忠盛也

その差を 夕暮乃事也

そのこころを 毛より 夕暮乃む

いまもことのついで 笛乃次はわのひせりなりし

うらやまの詞

あれをよと 源乃皮心

志の人の 源経 さいのうらやま

うの差を 笛れ傳のりきさしくと昔酒をぬかり

うらやまの詞 中暮あとのささうのりあ不軽拍

と也あいの福なり梳きりあふ

源五人 唐人也 夜暮不須説

十四

これよりなりとて 巻末の紙とみまゝにやうやくし

花虫 笠並 以討并ある巻名

源氏又十文秋迄之事あり 夕旁世才

夏比 六条院北池の蓮也

けたひのれとくれ表 持佛堂内なる事と只今源氏の

あつりて修養あり

なうて志つともせは ましく志なきは小具共を今乃

用りたるは人里

はなはく色のおやひ

花札ハナハ覆鐘フキネ文納モノ同深也 花鈴カガとゆら机也

先うめ とくま深也うのこれしと織物オリまくを

ふふのこちやう乃のこむ 持佛堂を教ふたて

れきして女三枝文の帳巻は四方小さぬれしくひくか
めかよよてまんたう波帯られしを ねむるあふれ
しつふるま

まんたうと して仏壇といまんため丸

は花と安置櫃 鼻陀羅あしやくしてを仏壇と云り

回おもて 指仏堂一間四面の四方波あふれし

さてまんたうとりをられしふるま

花れまを ぎ花なるを

くくの百おのゑりう くの志あう也 昔を唐方を用上

あうよれがさつ 脇佛 脇佛也 親經云 无量寿仏

御立室中親世者大徳至是二大士御立たたむ

うくくあなり ありうぬ佛也

若葉のほろ ぎを日中れおまゝ 青白堂を洞てあ

も花と帯てあう回ふ入てぞや 今もあし

みらとくくくあなりをそ みらと書てしつとよはり蜂

蜜と除て棟香のこくふらうれく死がろくくと志

れむもや虫の志あると云お仏あもを蜜と除たれま

ひとつあかり 名香よ衣袋に蓋あひんを

まひくくれお指經を 女三乃の事

天曆九年丁酉日村上天皇為母后被洗養養筆は花

経を八條 花びるゆおけより 天子一人のやう也

あまをたおらのをめ 女三と源氏乃世の契うと成

いふふいふいふいふい

とくを見送ふ うらつくみるうや

あうけたる 汁金

らんれ花うく 机りす入て本を今もひろみすかあしん

二すさうらよきとやうてけつり付て本の面をぬよた

坂所くくかめく其小櫛又をぬきと入てたびく机

壇かとのりさうのきと況よきあきうや

儀六壇あもあけ

佛れなるーちやうれう入り

ほ帳蓋のう入お仏と替りーく徳の机をのぬかなり

きやうがう けいさ 香品と持てゐるや

火とりやまも 火を

けいさ せ境をあふさうけいさや人れ教るう

大のこりまも 留や

まのれ物ぬりしらぬ 女三交乃女唇乃神をらん

ひまふー ぬおめくまおーぬあー

まおも 神と講演あふくま事もれさうくまあぬ人と

とーへぬあう

れまーとゆつり 女三交れおまーをぬゆつらぬ入り

もほともおのうりん 源よう年老結るうま女ことあ

はれ事ーとをねぬーのーとさうとけり

りの花乃中花 下は中花尽満 花の機覚性出ん

名目座業流業約我箇字同り人

蓮宗と云 又余懐心 かの日のおくハこそおれん心

らありいよくゐたてとたしこと也

のう傑乃 尼文の指針も翁乃多必めはあるわ

ゐたてたりき 悉きいませよ志とぬ入しきうりもま

まーとたり

七僧は眼 禪師 徳師 呪願 三礼 明教 華堂 謂之七僧は

みる人々 徳やうなとことちりて人たり

ひあううこまの 双比

よりの方のせうし 禪師はるりまら

ゆいひきされら 席大よ并吉法心也

みとまやう 候とそぬ林と大裏より北也

此候ともあり花浄福徳の候之四裏よりも院 院の法用意うあう

ゆりてをのりちよふふちちつこと ちつ之傍ともいりつと云知ようすとされる

朗脉采賦

僧の類へのあのもくして書

今一也 女三と源乃うりてはつふなり

ゆさうがの文 三葉文也

よおくくまへハ 源のひ沸在世乃るむ掃ふんこと也

まきくぬ 命あつまの神計受こと志けくふん事もいれ

うの文とも 三葉文 又も五かみへ里

院の沸さうぬん 朱桂何たる様の抽を源氏へてうき

若由は座業荒業約我箇字のりく人ラ

道業と云ふ 又金鑿心 かの月よみくはこふめくむら

らありいよくゐたてとたりしこと也

のう傑乃 尼文の指針の癖乃必めはあるも

ゐたてなりき 名をいませふことぬ入る華うも

まゝこなり

七傳は眼 禪師漢師呪願の礼頃な華堂也 謂之七傳は

みころ人を 隆やうなとこちつこつ人なり

ひつうこうこまの 双比

こつこのせうくし 禪師れるうも

ゆこひさきれら 摩大よ弁吉傳心也

みこまやう一はとてぬ林と大裏より化也

こひりころと 師増也 六条院の法用意うもつん

そのあつらえ

夕乃寺う一 睽と僧也 朗脈累賦

俗の類へのあのかつてこ書

今一と 女三と源乃う一は源乃なり

はさうがくの文 三集文也

よおくくくくハ 源のひ涕在世乃るひ掃るんこと也

まゝくぬ 命あつまの研計受ことあけくふをすむつれ

うの文も 三集文 又も五かか入る

院の涕さうぬん 朱桂何たつ様の袖を源氏くさうも

とりのたす

つのはあつひ 源のあまのまひなり

西れつと敷 女三のわつと後方乃西れつと敷

あつ人 きーろひ ききふひ丸

あつちこまき 尾うーなぬまあり

あつれひひ 女三のつひ

人目によろ 源代人目ほりりき^音みしあへり

うらよま 女三のつひ中心をみしあへり

十又親れ月乃 八月十又兼に書しし

あつのつひ けきありののふ

うきまあへり せしあへり

あみつ乃大す 阿比陀の大呪^法をみてあへり ^満

あつくまきあへり けし^詳くつひのま

あつま けしあへり

あつくあへり せしあへり せしあへり

あつちこまき 尾うーなぬまあり

あまのぬ 松虫そ人と後方兼に書し

あつへたしひ 人子まひ丸 女三れひをとり

あつこのま 女三れひをとり

あつちこまき 尾うーなぬまあり

あつちこまき 尾うーなぬまあり

あつちこまき 尾うーなぬまあり

もよほの心と也 ちひひぬ女とていさなりは源乃
あゆぬとまひなりし

すくばとこゝろて 琴と女三のいぢ人

月ありてく まうくを月のるなりなり

あま代討りいぬまに新りくはれとあり

進いんげん若若其其声声 呼

大おの志 夕芳も人く具してる

あまこころ 女と文の方よや

いとつれく 源討

肉代れま人 ぬらうゆ人 ーくされなり

中乃後の定を 批判也

いよとそも ぬみぬ杖をまふ物とま死てく雷のめり

らー死くれ

こらひ乃あつたる所 面白くもうのそめかまも

待ひけりし 三々涼中影月又二々中か家人心

お摧大細を 物 五町をありれまうひよにく町りさお

あまこころ人をましころけり

いさうらありし 一うたひーま也 藤

あしとれ縁あも ほもよて女とのまのまなり

みまの肉ゆも 女と物乃るし今源れは終と也

あつこころの心 女を遣い張三おあがしめあまも

肉なこあも 直上思ふと也

蚊虫の事 五巻の元 只虫の批判ヒハン事 一巻のあり
一 源氏とひり

元六年 御梅 或は大輔タシともあり

まゝありてなりなりと 冷泉院よりセツウの御恩ありて一注

書はつと

むのうくとあり ねるの乃御門もれもや月もツキぬひの

おろくへ 回八源院へタカありてとや あたゝく

乃月と光とと回くハ急志まらん人よみまをわ

月乳を旁 所起言妙也 ねる井の御門ミカドありてとも回八元

なりふ源を若首よりみりてとくと早ヒダ下るる

試み外の月もみそくハ我者りハ始とれなりなりと

ことなり事 され批判 双

みこ 源と共戸心と回車也

左巻門持 右巻お ね仕の子不ハ系ヒ置

下のさ録りり 源氏より下カ敷とキ無人れ物ヒすれも

布フ纏とて外ウチ振ウ成ニ丸 裾フと引ヒ人ニ里

ぬえかと 笛と車ウ代ニ中ニてくる

うねるのめと云 源氏乃御とありて也

冷泉を置れ時六条院へ御幸さうねりあり又也

乃町をわろくと思ふまくとなりを

録ひくくのひ 冷世云也

いよくことりの ぬを源との御也

その故乃奇 是より双

的りこ ひのうあはる

中へ交れはむこ 林好こへ源はるるわらひの源はるる

まえのうり源種

かたやもけうぬ 院号はと蒙ゆへ又のうくしくも

かきまとも甲下は詞

海王のへく 禁上のる端おもむを付たきなり

まあいつり付也 中へ交へや一進一やるは

まられりやりのう 中文の狎

あへれ乃るこく 九まう一後好ひし時よりけり

源へうもく一まとなり

思ひのかみ 冷れたる海門前中交いよくせは源もや

それ人の 皆入れそむいんくぬる世中う一ぬるの故乃

かをうつふせし

るのむらうら うちたたりしねまの 中文何事の源氏

を教はらうし 出家乃中ととらましあはらむや

けふ大やあさぬる 源氏種大裏まうく一いつは

勝ぶやまも 流るるうあはらひなり

こへいひしけし ちへいひしけしけしけしけしけし

あつりあしきとる

むちをうりし ちへいひしけしけしけしけしけし

事へあはらうしけしけしけしけしけし

とほり 何事ありかこ中へ文ははるを世と道
あふうか人の推量してやさん^目は^目も^目と^目や
ぬのうもくもほり 中文の源の心のはこくもほり
ほろあつとくもほり

そのれほひらん 神代書の詞はくまのなりを感へし
とくまの人 中文の源へは詞 六条の息子の事や
とくまの神 神のけはくても魂さふりしはくまの事や
とくまの 詞へまの事とほり

もれあはく 故世や
まのうらふ 出家ふりてまの
まのうらふ 出家ふりてまの
まのうらふ 出家ふりてまの

けふもあはし 源詞

お家のうらふ

涅槃経曰 亦お家の事不^レ久^ク持^テ

とくまの目連らめては通とえうると佛
よりくれとつ又佛に親近とくまの心もくま
やまの餓鬼道にかりうると救度せしめ
孟蘭盆経よりり

餓鬼の中

六条の獄中 佛経

しを 相違とては事なり

目連の母れふを帝といひん

佛よりのれ 羅漢を仏ふましといひんとも^目換^レ記^ルう^レ記^ル
しるすなとあり 時

そのれせ うれよ及ほりしとまを 仏も一人してを救
事なりとては孟蘭盆経と説てこゝ界の生^レ靈^ト

とてけり 何事ありかて申されはゆゑを世を道
たふうか人の推量してやさん^{コト}は^{コト}是事^{コト}とや
ぬのうもくもけり 中文心源の心のほこくもけり
経るおぼつしくなるや
そのれおひらん 神代書の討たきさうなりて感し
とる人 中文の源へ下り討 六条河原の事や
とれた御一 神のけなしては罷さふつゝお入^{コト}なりや
とてけり 別一巻の巻とてけり
もれおぼく 故世や
とてけり 出家ふとてける
とてけり 年乃けりなり

けふもおぼし 源討

おぼのりし

涅槃経曰 亦おぼなる不^{コト}久^{コト}持^{コト}

とくまなり 孟蘭盆経 斎^{ガキウ}鬼^{カキウ}中^{カキウ}

又月連救母生天経在大集法苑中 佛^{コト}経

二經^{ニヒ}参^{ニヒ}差^{ニヒ}するり ちししを 相^{コト}送^{コト}て^{コト}け^{コト}事^{コト}なる

月連の母れふを帝とてけり

佛よりの記 飛^{ウチ}漢^{ウチ}を仏おま^{コト}しとてけり^{コト}も^{コト}後^{コト}記^{コト}う^{コト}なり

しるなりあり 時

をけりせ うれよ及^{コト}けり^{コト}とてけり 仏も一人してを救^{コト}

事^{コト}なりとてけり 孟蘭盆経と説^{コト}て^{コト}る^{コト}界^{コト}の^{コト}生^{コト}靈^{コト}と

同抄
同抄
同抄
同抄
同抄

清類 シヨウライ と云ふ

やうく 出家を成してなうくくるを

志の成りし所なる 源も出家の心ありとなり

神ありし一様なり 句

三つ一れつとめおそくて 源詞

いとめそふ乃つと先法道よ也 シヨウキツジ 所成なるなり

へしうれよまきて静と思源の心ありなり

於やつ 二人は道心乃事成法成也 キチ 歎成所也

と双なり

所とくり 六条院へ 所依也

長文乃女涉 的所女所 夕若何ものつとこと源氏也

抄ひて冷泉院とておおなり 一めするなり

人なりとなり 大お天下れ政を シヨウキツ 治へり

院もけり 冷泉院

つらうされ抄て ねるのさせ給き六条院おとて

氣合る度れけひらうつらうとてせなり

申まう中く 平人おとの様は院おひれなり

中平とて中くを涉つとてもるなりなり 一みあり

ひたごましくは海是と也



